大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年九月一日發行第二卷第十一・十二號（大正三年八月三十一日印刷納本）

近代思想

廢刊號

【本號に限り定價金貳拾錢】

久津見蕨村先生著

ニイチエ

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ。

四六判美本
定價九十錢
郵税八錢

内田魯庵先生著

沈默の饒舌

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈默の境中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその言の懇切なる論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評して咄哉と云はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參ずる能はざるもの。

三六判美本
定價八拾錢
郵税八錢

東京小石川原町六
丙午出版社
振替東京一五六八六

東京小石川原町六
鷄聲堂
振替東京一三三五三

馬場孤蝶氏
堺枯川氏
生田長江氏
相馬御風氏
序

大杉榮氏著

生の闘爭

▲全一冊特製▲定價金一圓▲郵送料八錢

新刊

茲に飽迄眞摯なる社會の研究者あり、飽迄熱心なる人道の鼓吹者あり、有ゆる僞善と虚飾とを避けて直に本眞の生活に就かんとし、あらゆる不義と非法とを斥けて、直に自然の公道を行かんとす。大杉榮氏は、現代に於て、最も權威ある青年思想家也。今最近數年間に公にせる論文數十篇を集めて此一卷をなす。彼の思想を愛する者は勿論、彼の主張を惡む者と雖も必ず一度は此の書に於て組織立たれたる彼の言論に聞くところ無かる可からず。

内田魯庵氏
大杉榮氏
序

徳田秋江氏
宮田脩氏
文

警句集

女と惡魔

安成二郎氏譯

▲特製美本
▲定價四十錢
▲郵税四錢

東京市牛込區矢來町中ノ丸五十八號　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七二四二番



第二巻　第十一・十二號

廢刊號

『生の闘爭』序

『生の闘爭』は、最近二年間の、多少の僕自身の表現である。僕は今、此の僕自身に就いて、何等の謙遜、辯解、又は傲慢の辭を以て、更に自ら說く要はない。それは既に、本書の中に、可なり十分に現はされてゐるからである。

僕は只だ、此の僕自身が、眞に其の生に忠實ならんとする多くの人々に、必ず多大の暗示若しくば共鳴を感ぜしめ、又多大の力を寄與すべき事を確信してゐる。そして此の確信は、僕をして本書を公にせしめた、主要なる一理由であつた。

生の闘爭は、理論ではない、事實である。只だ其の事實が如何なる形式の下に現はれるかは、生の內的狀態と外的狀態、即ち境遇と氣質と思想とに係る。そして僕は、境遇と氣質との接觸とが此の闘爭形式を決定する主要素である事を認めると共に其の接觸から生じた思想も亦等しく一主要素であり、且つ或る意味に於ては寧ろ最後の決定的要素である事を信ずる。此故に僕は、殊に僕の思想に就いて、僕と所見と異にする人々の眞實なる批評を求める。僕が、僕自身とは多少立場を異にする馬場孤蝶、生田長江、相馬御風、堺利彦の四氏に、本書の序文を求めたのも此の意味からであつた。

——榮——

大杉君と僕

堺　利　彦

日本の社會主義運動に三派の別が生じて居た。今でもボンヤリ其形が殘つて居る。

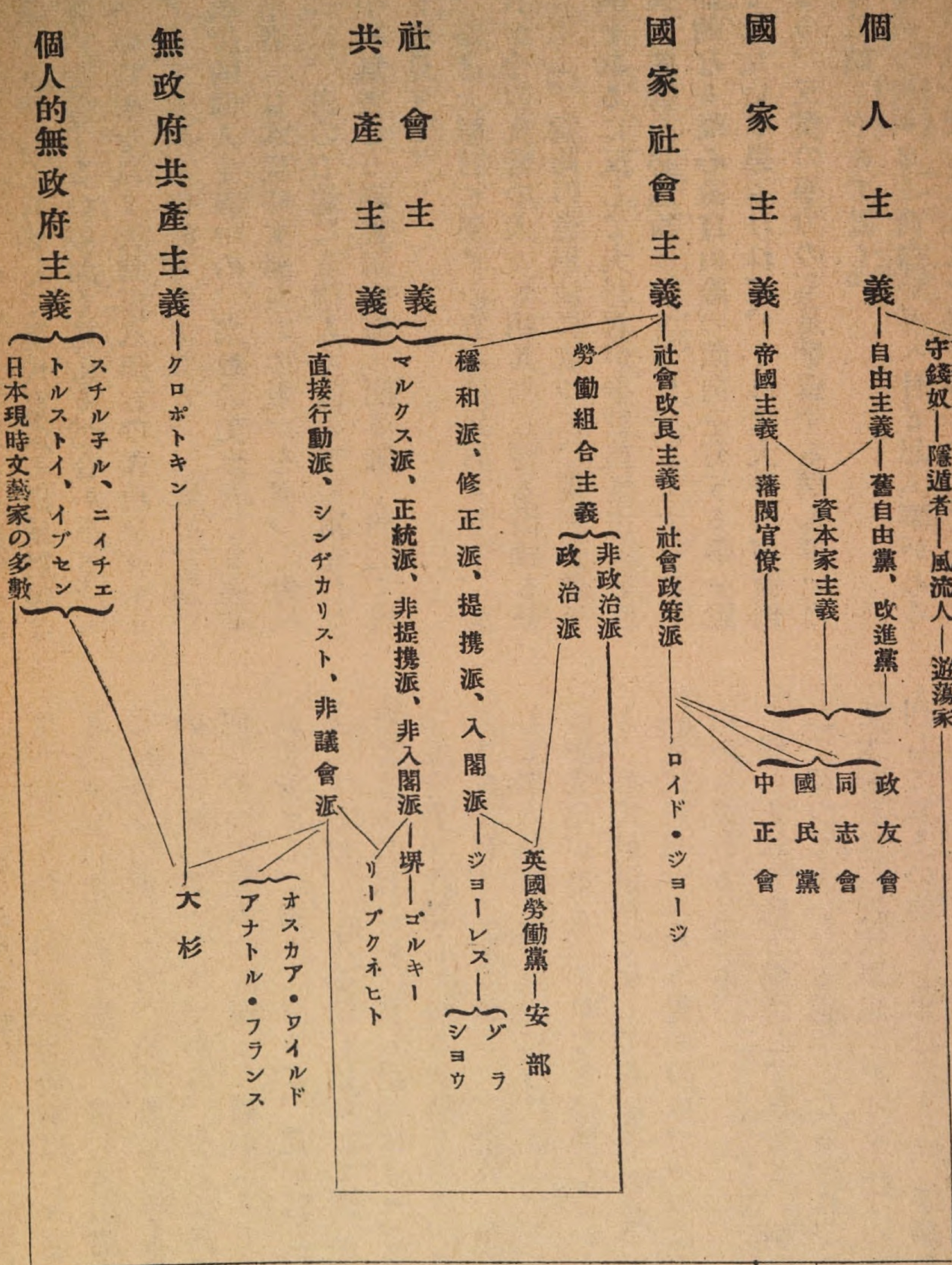
一、温和派（或は修正派）
一、マルクス派（或は正統派）
一、直接行動派（或は無政府的社會主義）

之を人に就いて云へば、安部磯雄君は右翼に屬し、幸德秋水君は左翼に屬し、僕自身は中間派に屬して居た。其中、幸德君は殺されたが、安部君と僕とは略ぼ昔のまゝの立場で續いて居る。そして今日、幸德君の立場を繼承して居る者は即ち大杉榮君である。

尤も、安部君が既に温和派の域を脱して國家社會主義の範圍に屬して居るらしく見える點もあると同じく、大杉君は既に直接行動派の域を脱して無政府共産主義の範圍に屬して居るかも知れぬ。或は更に進んで個人的無政府主義の範圍に踏みこんで居るかも知れぬ。

總て主義態度の範圍はそう明瞭に區分する事の出來るものではない。實際運動に當つては、種々の便宜上、どこかに一線を劃して黨派團体の區分をつけるけれど、理論の上から見る時には、有らゆる思想は皆濃淡のボカシを以て連續して居るのである。此の關係を稍明瞭に示す爲め、左に一つの表を作つて見る。

勿論左の表は只大体の色別であるから、餘り嚴密な意義に解されては困る。それにつき一つ面白い事は、社會主義の左端なるシンヂカリストと、其の右端の又一歩右なる勞働組合主義の一半とが其の非政治派、非議會派たる點に於て一致して居る事である。進歩派と保守派と其の兩端に於て却つて相近づくは注意すべき現象である。又左の表の全体を見渡すと、左端も右端も同じく個人主義で、こゝにも思想の環が一周して更に相近づかんとする形が現はれて居る。實例を以て此點を考へて見るに、極端なる自由貿易論者や自由競爭論者は、政府の干渉を出來得べきだけ排斥し、個人の活動を出來得べきだけ擴大せんとする點に於て、



個人主義
守錢奴—隱遁者—風流人—遊蕩家
自由主義—舊自由黨、改進黨
國家主義
帝國主義—藩閥官僚
資本家主義
政友會
同志會
國民黨
中正會
國家社會主義
社會改良主義—社會政策派
ロイド・ジョージ
勞働組合主義
非政治派
政治派
英國勞働黨—安部
社會主義
共產主義
穩和派、修正派、提携派、入閣派—ジョーレス
ゾラ
ショウ
マルクス派、正統派、非提携派、非入閣派—堺—ゴルキー
リープクネヒト
直接行動派、シンヂカリスト、非議會派
オスカア・ワイルド
アナトル・フランス
大杉
無政府共產主義—クロポトキン
個人的無政府主義
スチル子ル、ニィチエ
トルストイ、イブセン
日本現時文藝家の多數

頗る無政府的傾向を有して居る。又個人的無政府主義者の主張は、時として現代富豪の横暴無頼なる振舞に裏書するかの如く見える場合がある。ニイチエの哲學を以て大倉喜八郎君の成功をジャスチファイする事も出來そうである。又表の左端なる無政府的個人主義中の、宗教的文藝的なる逃避者耽溺者（日本現時文藝家の多數）を取つて考へる時には、表の右端なる個人主義の下に附記したる、平和無害なる獨善獨樂家と頗る善く相似て居る事を發見する。

是で略ぼ大杉君と僕との立場の異同も分り、又大杉君が今の文壇の人々と稍共鳴し得る因縁も分つたと思ふ。猶此の色別法に依つて、僕が多數平凡主義を取るに反して大杉君が少數英雄主義を取り、僕が唯物論必然論に歸するに反して大杉君が稍神秘的なる唯心論自由論の傾向を有する事を説明して見たいと思ふけれど、それは大分事が面倒にもなり、又僕の學力の不足を感ずる點も多いので、今は姑くやめて置く。

別に一つチョット面白い考へ付と思ふ事があるので、それを記して此文を終る事にする。

日本の社會主義運動は今正に一頓挫の場合である。從つて總ての社會主義者はこゝ暫く猫をかぶるの必要に迫られて居る。但し其の猫のかぶり方には色々の別がある。只沈默して手も足も出さぬのも一種の猫かぶりである。少し保護色を取つて何かやつて見るのも固より猫かぶりである。所が僕自身として考へて見るに、僕が若し保護色を取るとすれば、一歩右隣に退却して國家社會主義に行くより外はない。然し退却はイヤである。そこで止を得ず沈默して居る次第である。然らば大杉君の立場はどうかと云ふに、是は一歩左隣に前進して個人的無政府主義に行けばよい。そこに文藝の中立地がある。それならば同じ猫かぶりにしても、形式が退却でなくて前進である。大杉君が『近代思想』をやり得たのは、一つはそういふ理由からであると思ふ。

然しそれも餘り前進しすぎると、例の環が一周して却つて大いなる退却となる恐れがある。そこで大杉君は『近代思想』がイヤになつて、斷然廢刊して其上の前進を思ひとまり、手綱を控へて新に『平民新聞』を出そうとして居るのである。

人間主義

相馬御風

大杉君

ラムスースの名著『人間屠殺所』が佐藤緑葉君の手でわが讀書界に紹介されてからいくらも間のない今日、もうヨーロッパの天地は本物の人間屠殺所と化してしまつた。幾代かの人類の努力で出來上つた科學の富は、今や悉く戰爭と云ふ唯一つの目的の爲めに使用されて居る。戰慄すべきではないか。そして此の戰慄すべき慘劇の間に立つて、幾億萬のヨーロッパの人民は今どんな事を考へて居るだらう。如何に感じて居るだらう。どんな風に生活して居るだらう。彼等幾億萬のヨーロッパの個人のうち果して幾人かゞ本當に自分自身の意識を以て動いて居るだらう。

此の時に當つてフランスではジョーレー氏が殺され、ドイツではリープクネヒト氏が殺された。今度の戰爭で意味のある人間屠殺と云へば先づこれ位のものである。習慣的に、仕方なしに、行はれて居る國と國との戰爭の間にあつて、これだけは兎に角要領を得た屠殺である。もし此の屠殺を始めとして、今一つの戰爭がヨーロッパに開始されるとしたら、その時こそ戰爭は今迄と違つた新たなる意味を以て僕等に更に大なる亢奮を與へるであらう。

大杉君

ジョーレー氏とリープクネヒト氏との殺されたと云ふ報道は、僕等の間に興味深い話題とならざるを得なかつた。僕等はそれについてさま〴〵の事を語り合ひ、論じ合つた。そしてそれらの談話の間に僕等は幾度となく君を聯想しないでは居られなかつた。隨分と久しい間自己の持する主義の爲めに眞面目な戰ひをつゞけて來て居る君及び君の友人を聯想しないでは居られなかつた。

『生の闘爭』――かう云ふ標題の下に今度君の評論集が公にされるさうだが僕はそれが果してどんな風に現在の日本の人達を動かすかについて多大の興味を持つ一人である。ヨーロッパ大陸の戰亂

によつて、殆んど全く新文明輸入の途を絶たれた如き觀ある此の頃の日本の狀態は、今こそ日本人をして眞に自己の世界的地位を自覺せしむべき時である事を示して餘りある。之れまで日本國民として考へて居た一種の妄想以上に、人間としてもつと〳〵力を入れて考へなければならぬ問題のあつた事を眞に彼等をして自覺せしむべき時である事を示して餘りある。而して此の重大な時期を眞面目に通過する事そのことによつて、吾々日本人は始めて新時代の生活問題を問題とする程度まで進み得るのだと思ふ。かう云ふ時期に際して偶然にも君の評論集が廣い讀書社會へ公にされるやうになつたと云ふ事は、僕等の大なる喜びとするところである。

此の頃僕は新刊の『ルソーの眞髓』と題する書物を愛讀して居るが、その中から僕は非常な感激を以て次の如き一節を拾ひ出した。

『書籍の上に於て縁遠い義務を求め、鄕里に於ける義務を輕視する四海一視同仁主義者を信じてはならぬ。斯の如き哲學者は、隣人を愛する義務から免れんが爲めに、韃靼人を愛するものである』

氏の「隣人を愛する義務から免れんが爲めに韃靼人を愛する」哲學者に類した思想家の多い日本の思想界に對して、最近殊に烈しい不滿を、時には堪へ難い憎惡をさへ感じつゝある僕は、その不滿と憎惡とを僕等に先立つてわが思想界に向つて言明した君の如き先覺者の評論集が、わが文壇に提供される事を、更に大なる喜びとする者である。僕はせめて君などをこそルソーの所謂「書籍の上に於て縁遠い義務を求め、故鄕に於ける義務を輕視する四海一視同仁主義者」ではないと信じて居たいからである。

大杉君

併し、僕が君の言説について深い興味を感じつゝある所以のものは、單に君が人生觀照上の論議よりも、實際明な社會革命を問題として居ると云ふやうな事からばかりではない。謂ふところのレボリユーシヨナリーであるからと云ふばかりではない。寧ろ君が『罪と罰』の主人公のやうな觀念狂的革命家でもなく、ドンキホーテ式な樂天的奮鬪

家でもないのを、君の爲めに大に喜ぶものである。君が若し人類全体の幸福とか共通善とか云ふやうな空漠な縁遠い義務的觀念の爲めに社會革命などを叫び廻る人であつたなら、僕等は君の言説が如何に現實的に見えてもそれには決してだまされなかつたであらう。併し君は君の評論集の標題に於ても示して居る如く、底深く根ざした「生の闘爭」を自覺し、之れを肯定し、その絶えざる闘爭の緊張感そのものを味ひつゝ生きることそのことに、君自身の生活の最大價値を認めて居る、强い自我主義の上に立つた本當のリアリストである。君の社會批評なり、社會革命の主張なりが、單なる觀念的言説でないのは、その爲めである。手段と目的とを區別したり、結論と過程とを別にして考へたりするやうな舊式な社會改良家でない點に、君の本當の强味がある。社會革命家としての君がソーシャリズムよりはアナーキズムを、アナーキズムよりはセンヂカリズムにより多くの親しみを持つのは、その爲めではないか。君の歩む生活の一歩々々が、同時に全体の君の生活であるべき事が、君の求むる緊張生活であると僕は思ふ。而してその故にこそ闘爭を以て生の本體となすところの君の主張が僕等に强き共鳴を與へるのだと思ふ。その點に於て君は實にリアリストであると同時に、アイディアリストである。充分なる意味に於ける人間である。

僕は此の最も積極的な人間主義を君のうちに見出した事を、何よりも愉快に思ふ。

大杉君

僕は一日も早く君の評論集の出版されん事を望んで止まない。そしてそれを手にして再び君に何か話しかけるのを今から樂しんで待たうと思ふ。

溝ざらへ

小劍

大杉君、君は富の分配を公平にしやうなぞと、野暮を言ふ人ではあるまいが、しかし勞働者の中へ行つて、勞働者と苦戰を共にしやうといふ人らしい。同情といつては、語弊があるかも知れぬが、兎に角勞働者に同情してゐる人らしい。――勞働者の方からいへば、そいつを梯子に天へ昇らうとする、三文野郎で、何をべラボーな、書物を積んに同情なんぞして貰いたくねえやと言ふかも知れないが――其の同情家が、この貧しい人間に向つて、無報酬の勞力を要求するのは、少々矛盾ではあるまいか。尤も世の中は總べて矛盾で成立してゐるんだから、敢へて君の矛盾のみをどうかう言ふのではないが。……

それは兎に角として、僕は此頃無代の原稿は書かないことに決めた。無代でなくても餘り安い原稿は書かないことにした。無論高い原稿でも書けない時は、たとへ千萬金を積まれたとて書けないが――金を積んで頼まれる、差し向き入用の金に不自由をしてゐるが、しかし書けないものは書けないので、寶の山に入りながら、手を空うして斷るといふやうな苦しいこともある。――

そこで『近代思想』もまァ書かないと決めてゐた。別に世の中に向つて吹聽してみたいと思ふことがあるでなし、能ふべくんば沈默して、餘生を送りたいと思つてゐる僕には、元氣のいゝ諸君と共に口角泡を飛ばす元氣も必要もないのだ。『加賀樣は百萬石の靑田かな』とでも言つて、お歴々のなさることを橫目でチラと拜見してゐればよいのだ。

ところが今度はいよ〳〵君等の仕事としての『近代思想』がお仕舞ひになるといふので、君の請求により僕の內規を破つて無代でこの一文を書くことにした。成るべくは、これが僕の無代の仕事の最終としたいと思つてゐる。

大杉君、籔から棒のやうなことを言ふが、僕は勞働者に接近することは嫌ひだ。別に勞働階級を

敵とする理由も必要もないが、彼等の多くは友人として話が合はない、趣味が違つてゐる。電車に隣り合つて腰をかけても臭くていけない。幾ら君だつて臭いのがよい、とは言ふまい。汚ない印袢纏の汚れた臭いやつを着て、頭は蓬の如く、頸筋は垢だらけ、向ふの身体が此方へ障はると此方の身体に汚點が附きさうな人よりも、時代粧の粋を凝らして、ジャスミンの芳香を漂へてゐる若い美しい人の方がよいには決つてゐる。僕は別に原因を考へて結果を究はめやうとするものではない、只眼前の事實を語つてゐるのだ。電車の中には麗々しく『他人に嫌惡される服裝をしたもの及び醉漢は乘車を禁ず』といふ規則が貼り出してあるが午後六時頃になると、隨分汚ない人や、酒に醉つた人や、汚なくてさうして酒に醉つた臭い人たちが、ドヤ〳〵と乘つて來て、四邊構はず腰をかけて醜陋な高聲を出すことがある。資本家階級が幾ら横暴でも、僕の一身に對して直接にこれだけの迷惑はかけない。だから僕は勞働者が嫌ひだ。僕はこんな場合大抵電車を下りて、次の電車に乘るか、歩くか、人車に乘ることにしてゐる。

大杉君、人は己れに優つたものに反抗し、己れに劣つたものを輕侮することの好きなものだ。富に於て、智識に於て、體力に於て、藝能に於て、皆さうだ。勞働者の中へ行くとか、味方するとか、同情するとかいふのも皆この點から來てゐるのらしい。自分の道樂なら溝ざらへでもするがよい。それも結構だと挨拶しておかう。蓼食ふ虫も好き〴〵だ。

しかし溝ざらへをするなら、成るだけ靜かにやつて貰ひたい。この沈默道人が晝寢の夢を結んでゐる中に、溝がスッカリ綺麗になつたといふ風に願ひたい。——幾ら掃除しても人間は塵埃の塊だからまた直ぐ溝は詰まるだらうが、一時でも綺麗サッパリとなるのは、この道人にも有り難くないことはない。

餘り喧ましく騷ぎ立てられて、晝寢の妨害をされては、何んにもならぬ。それならば寧ろ溝が詰まつたまゝで、晝寢してゐる方がよい。どうせ僕等の一生はもう僅かだ。

三忘の覺悟

蕨村生

『九月號を以て僕等の告別號と爲』すに因て、『何か一つ書け』と云ふのが、八月十日に僕の許へ届いた大杉、荒畑兩君からの葉書であつた。

熱いので近來少しも筆を執らない僕に取ては之は頗ぶる重大な任務である。夫れに僕は性來の大臆病ものである。併し夫れは死ぬるが恐さの臆病ではない。兎にも角にも生きて居る間は餘り恐い目に遭ひたくない。及ぶべき丈の自由――我儘と取つて下さつても差支はないの――を保つて居たいからの事である。

所が人生の一大事――一大轉換を人の上に、國の上に試むる。非常な痛快事である。一寸は臆病な僕でも遣つて見たくなる。併し夫れをやるには恐い目を見ねばならぬ。直ぐに殺してくるれば一想ひの話で、いつそ其方が氣持が良いが、そうもしないで暗い所へ入れる。高が二年か三年でも全く自由を奪はれる。そして辛い事をさせられる。僕は夫れが恐い。夫れが厭である。

夫の痛快事を知りながら敢てそこへ行かれないのは、此臆病からである。諸君、笑つてくれ給ふな。僕は實に此臆病ものなのである。

學問の、理想のと云ふが夫れは後の話で、總ては事實が前である。科學であるの、發見であるのと云つても、亦同樣な話で、事實があつて後ちに夫れがあるのだ。

エッキス光線であるの、ラヂュムであるのと云つても、旣に世界にその事實があつて、然る後ちに科學が夫れを發見したまでの事である。科學が獨創を以て造り出したのではない。

之から考へる。僕は臆病と云ふ事實があつて、然る後ちに夫の痛快事に進まぬと云ふ理論が出來たのであつて、先づ夫の理論があつて後ちに臆病が生じた譯ではないらしい。誠に意氣地のない、お耻しい次第であ　。

眼界を轉じて廣く世の人を見る。就中新しいを標榜してゐる人々の上を見る。彼等は先づ理論から進んでをらるゝ樣に見える。云ひ替ふれば理想が先づ出來てをらるゝやうに見える。誠に立派である。

併し其理想通りに進退行動さるゝかと見るに、夫れは少し怪しい。何にかやらなければならぬと云つてゐても、一向何にも遣らぬ。理論は馳け出しても實行は晝眠をしてゐる。少々ぢれつたい樣だ。

僕は想ふ。之は事實と發見とが齟齬してゐる結果ではあるまいかと。露骨に云ふと發見は勇敢である。事實は臆病である。臆病の事實を持つた以上は臆病を發見して、夫れに適當な理論を造れば善いのに、事實に適はない——其實夫れに背いた——發見をしたに因て、そこに其矛盾が生じてゐるのではあるまい乎。

果してそうとすると僕の方が筋が通てゐる。事實と發見とが一致してゐる。事實が臆病であるから發見も憶病である。理論も實行も皆臆病である。誠に意氣地のない、お恥しい話ではあるが、之が僕の事實だから已むことを得ない。

併し僕は又別に考へる。若し僕がどうかして發見を事實の先にやる。理論を性情——臆病の——に構はずに立てるとすると、恐らくは之と同じく事實と發見との齟齬が生じて困る事になつて居るに違ひない。

此場合、僕はどうするだらう?。こゝを一つ考へて見る。考へて見ると斯う云ふ羽目になつたら、僕も亦男兒である。臆病だから誠にビク〳〵ものではあるが、一番やるね。一番奮發して事實と發見との齟齬を全く除去するに努める。

之を努めるに就ては、先づ第一にウンと腹に力を入れて一大覺悟を極める。乃ち臆病を驅逐して仕舞ふ。女も入らぬ。金も入らぬ。家庭も妻子もあつたものぢやない。一身も亦全くないものとしてかゝる。

『御所櫻堀川夜討』とか云ふ淨瑠璃の中の辨慶上使の段に、辨慶の曰ふ、勇士の戰場に臨む時三忘と謂つて忘るゝこと三つありと、そして其忘るゝ

ことの三つとは家を忘れ妻子を忘れ身を忘るゝの三つである。此場合僕ならば之をやるね。之をやれば暗い所も恐くはない。昔で云へば三尺高い木の空も更に恐いことはない。

そして猛進するね。向ふ見ずに喰つてかゝるね。之が此羽目に落ちた場合を考へた僕の考案――否執意だ。

凡そ世界のレボルショニストとかマーターとか云ふものゝ行くべき道はこゝであらう。僕のやうに家庭や妻子や金や女が可愛いものゝ所詮〳〵企て及ばぬ所である。只斯う云ふのは斯う云ふ羽目に陥つた場合を想像したまでの事――夢さら事實ではない。鶴亀々々!!!

大杉さん、荒畑さん、あなた方の御仲間に斯う云ふことを申すは、出過ぎた話であると存ずるが暑い時分、何にも書くことがないので、已むを得ないで――

文壇の唯一者

棨

僕は荒畑寒村を推す。

寒村は、現代作家中、生の蒙る社會的壓迫に對して、最も敏感である。彼れには、此の壓迫の根本原因に關して、現代作家の殆んど何人も有せざる、明晰なる知識がある。そして彼れには又、此の壓迫に抗して、飽くまでも自己の生の擴充を實現せしめんとする、最も強烈なる憎惡心と反逆心とがある。寒村は實に、此の點に於いて、現代作家中の唯一者である。

僕自身及僕に近い周圍のあらゆる人々が、彼の組織的暴力のために、殆んど全く其の生を蹂躙されてゐる今日、僕は此の組織的暴力に對する憎惡と反逆との外に、即ち僕等が眞に生き得る唯一の此の生活の外に、殆んど何等の美も善も眞も亦利も、見出す事が出來ない。

寒村は甚だ多忙である。彼はその全身をさゝげて、常に直接にその敵に當り、又當らんとしてゐる。彼れは今此の直接の闘爭及びその準備の外に、多く暇を持たない。藝術は、彼にとつては、間接の闘爭生活である。從つて彼の作物は極めて數が少ない。又甚だあはたゞしい作物のみである。しかしそのあはたゞしい中にも猶彼れの藝術的天才の閃めきは到處に見出される。嘗つて『生活と藝術』に載つた『逃避者』の如き、又『近代思想』に載つた『冬』の如き、一小短篇ではあるが、彼れの作物中、恐らくは最も傑出したものであらう。―新潮九月號所載―

大杉氏等への忠告

岩野泡鳴

大杉君、

いよ〳〵『近代思想』の告別號を出すさうですね。そして僕にも―多分、ただで貰つてゐたそのお禮にだらう―何か書けとおつしやいます。惡口でもいゝとのことですが、僕の君等の思想と行動とに對する根本的異議に就いては、いつか君等が思想交換の意味で内田魯庵氏と僕とを鴻の巣に招待した時に大分述べたと思ひます。

僕は、君等の雜誌を受け取り出してから、一種特色のある雜誌だと思つて、僕とは立ち場も傾向も違ふとは知りながら、尊敬と注意とを拂つて、傍觀の代りに、傍讀してゐました。然し段々號が重なるに從つて、君等の眞面目と不眞面目との殊更らめいた意識的混同が鼻に付いて、段々いやになつてしまひました。一例を云へば、飜譯をするにも Revolution ではその筋の忌諱に觸れるからと思つてだらう、頭字のアールを落して、『進化』として通したなどは、皮肉と云へば一種の皮肉でしようがつまり、樂屋落に過ぎなかつたのです。

正當な皮肉や逆説やすね氣味が必要な場合もありましよう。が、君等は隨分それを亂用してゐた。君等から云へば、その亂用がまた必要な事情にあつたと辯解するでしよう。然しそんな苦しいはめになるのも、僕等から云へば、君等が多少物好きに身づから招いた罪がなかつたとは云へまい。

その第一の理由は、―これは君等にはどうせ承知出來まいが、―わざ〳〵社會主義を懷抱してゐるにも及ばなかつたことだ。世界の近代思想の要求を深めるのが本旨なら、いつそのこと、僕等のやうに徹底した個人主義、自我主義まで來た方がよかつた。すると、社會主義にも國家社會主義がある如く、個人主義に立つて僕のやうな個人主義的國家主義になれないことはなかつた。

第二には、社會主義の範圍内に於て、ロイドヂヨルジのやうに、利口な應用を利かせる道はないでも無い。君等でも若し政權が握れるとならば、恐らくその道を執るやうになるだらう。然るに、

君等は君等の本性を意識しないで、若しくはどうせ大臣にはなれないと凡俗的に諦めた燒け心から徒らに破壞的に、破壞的にと進まうとする。マルクスではまだ駄目だと云つて、サンヂカリズムに馳せ、サンヂカリズムでも亦その傾向の最も極端なのを最新傾向だと云つて、それにばかり向ふ。

これが若し英國の女子參政權運動軍に於けるやうな程度の破壞的行動なら、さきが分つてゐて、女子に參政權を許してやりさへすれば濟む。且、この許可は遲かれ早かれ、わが國にさへ、實現するに極つてゐる。ところが、君等の向ふ破壞には、それが徹底的であればあるほど、單純のぶち毀わしだ。そして若し多少でもどこかに締めくゝりを與へようとすれば、『デモ』主義とか、非戰論とか、共產的分配とか、つまり、人間界では實際に出來ない相談だ。

今一つ、君等の、廣い意味の仲間には、深淺高下あらゆる種類の彌次馬が多い。社會主義の演說が許されてゐた時代には、その種の演說を誰れでもやり易い禁酒會演說をするやうな調子でやつてゐたものが多かつた。またわけもない不平を漏らせるし、またそんな不平演說を無學の連中が面白がつて聽くしするからして、社會主義をかこつけに―たとへば、其時代の兒玉花外氏の如く―演說や運動じみたことをやつたものもある。また、自分は實際的に社會に對する反抗をしたり、獄に投せられたりするほど馬鹿でないが、君等の馬鹿々々しい運動や言論の傾向に於て、自分の內心に有する小不平が共鳴するのを喜んで、君等に贊成若しくは同情してゐるにとゞまるものもある。たとへば、上司小劍氏の如きはそれに近いやうに見える。また〳〵もつと、ずつと深入りしたものでも、その實際にやつてたこと若しくはその必然の結果を、無學若しくは無考へであつたが爲めに、意識しないでゐて、さていよ〳〵となつてから初めて目がさめたやうに後悔した例が、君等に取つてはこれまでの最大事件であつたかの事件に於て見られたやうだ。渠等は皆あらゆる意味の彌次馬である。君等の事業若しくはこれからやらうとすることには、かゝる彌次馬が半ば以上のから景氣を添へてゐたし、また添へようとするのである。

君等自身に於ても、曾て君等の間に僕をなぐつ

てやらうと云ふ議案を出した。そしてその理由は、僕をなぐれば新聞に出るから、從つて君等も世人の注意を引くと云ふのであつたさうだ。僕の知るところでは、こんな廣告手段は外國の陰に鬱勃たる詩人や社會主義者の間に例がなかつたでもないやうだ。つまり外國の例の燒き直しをしようとしたのであつた。その難は僕も幸ひに無事に免れたが、君等の破壞主義や出來ない相談は、矢ッ張り、單に、彌次的でなければ、外國の燒き直したる氣味がある。

そんな安價なことに向つて君等の貴重な一命を棄てようとするのは、無謀でなければ、無反省のいたづらであらう。君等にして若しこの態度を改め、もつと眞實に、もつと眞面目に、社會の（破壞ではなく）改善若しくは新建設にたづさはらうとする氣になれば、また別に道がないではない。今回君等は今までの雜誌を廢刊し、別にもつと實際運動的な小雜誌を勞働者等の爲めに出さうとするに於ても、若し渠等をたゞ君等の、わけもなく、大分にいゝ氣になつたやうな調子に乘せるだけだとすれば、僕等は少しも贊成することが出來ない。

これまでの雜誌を回想して見ても、君が僕等の思つたよりも學者であつたこと、荒畑氏か小說に於て一種特別な實生活を描寫しようとすれば出來さうなこと、安成二郎氏が社會主義者としての貧乏生活歌が歌へたこと、などを紹介したに過ぎなかつた。

兎に角、君等はもつと靜かに考へて、僕の云ふいゝ意味で君等の態度を一新する必要があらうと思ふ。以上。大正三年八月十一日。

胡麻鹽頭

貝塚澁六

◎佛蘭西のラポポールと云ふ人のベルグソン評を譯して、『唯物論者の見たベルグソン』とでも題して見たいと思つて居たが、如何も時間が足りなくなつたので、こゝには其中のホンの一部だけを譯しておく。

◎『ベルグソンは其文章の力の著大なるに係はらずヘーゲルと同じく晦澁難解の哲學者である。私としてはヘーゲルよりも一層難解だと思ふ。ベルグソンを理解する事の困難は、其の題目自体から生ずるので、又其の哲學の本質から生ずるのである。元々ベルグソンは明晰と云ふ事を恐れて居る。既に明晰と云へば、區分を意味し、類別を意味し、一定の範圍限界を豫想して居る譯で、それらは總て理智の職掌に屬して居る。然るにベルグソンは合理派の讐敵として、頗る此の理智なるものを輕視して居る。

◎『所が、直覺と云ふ者が中々容易に秘密を明して吳れるものでない。直覺の本塲は言語道斷えた所に在る。其の本來の要素は神秘不可測の深淵に沒入した實在である。神秘實在の道途には道しるべの一里塚がない。理智の光は到底直觀の道を照すに足らぬ。ベルグソンの筆法は實に巧妙である。大文學者の筆法であり、又大藝術家の筆法である。

◎『然し其の藝術家たるが故に、彼が自己を表明する象徵幻像は只益々難解を重ねるばかりで、少しも解釋に向つて進む所がない。此幻像はベルグソンの奥の院の御神体に人を導いて行く。人は種々なる暗影怪物に圍繞せられて、そこに美の鼓動を感ずる。但し其時、理解を求めてはいけない。理解を求める事はベルグソン哲學の本旨に背く業である。ベルグソン哲學は全然直覺である、概算である、氣分である、命令である、心持である、獨逸語のエルレーブニッスである、英語のエキスピリエンスである、即ち經驗である。ベルグソンの哲學は只体得感知せらるべきものである。ベルグソンの講義は非僧者の營む法會である。俗人のする祈禱である。其の聽衆は御信心の禮拜者である。

◎『佛蘭西大學の第八教室には、毎週金曜日の午後五時より六時までの間、選りぬきの各國人より成れる群集がベルグソンの講義を聞きに詰めかけるが、其の教室に漲りわたる空氣の中には、明白に宗教的な何物かゞ浮かんで居る。

◎『忘れもせぬ、或晩の事。講義最中、電燈が不意に消えた。ベルグソンは落ちつきはらつて、斯かる偶然な些細事に氣を取られるには及ばぬと云つたばかり、其まゝ講義を進行させた。むせかへるほど教室に詰めこんだ聽衆の中からは、一語も一音も發する者がなかつた。勿論、聽衆の多數は佛蘭西人で、習慣上諧謔と懷疑との傾向を持つて居る筈であるが、それで居て右の通りであつた。其の有樣は丸で教會の闇の中で會集が跪まづいて祈禱をすると云ふ趣きであつた。屋外の空には雷がはためき、電光が閃めいて居た。而も聽衆は何物をも見ず、何物をも聞かずに居た。こゝは全く別天地で、彼等はベルグソンと共に純粹直覺の仙境に遊んで居たのである。

◎『ベルグソン哲學にも、ヘーゲル哲學と同じく、右黨と左黨とが出來た。保守的の右黨は直覺說と理智排斥論と神秘說とにすがりついて、それに依つて内に、神、靈現、不滅、絕對の自由、自律の人格などいふ、有らゆる舊信仰を持込まうとして居る。是等の人々に取つては、ベルグソンは實に、

唯物論と必然論との二大怪物から此世を監はんが爲に神から遣はされた新メシアである。直覺の太陽は神に進むの道を照らす者である。

◎『然るに一方には革命的なるベルグソンの左黨がある、或は一時あつた。それはソーレルと其の門人のラガルデルとベルトとに指導せられたシンヂカリストである。シンヂカリストはベルグソン哲學の動的觀、即ち其の實行論方面を捉へたのである。ベルグソンは何物をも實行に歸する、何物をも生の神髓なる衝動に歸する、何物をも活動力ある思想に歸する、何物をも創造力ある潑溂の感情に歸する。故に革命的シンヂカリストは此の實行の哲學を取入れんとしたのである。

◎『然るに暫くして後、シンヂカリストも亦、ベルグソン哲學が其の本質上、合理論反對の態度上、どうしても保守の哲學である事を知るに至つた。』

◎まだ餘白が少しある。此夏、僕の家の小庭に十五錢で買つたダリアの鉢が一つ置かれた。赤い奇麗な花が三つ四つ咲いた。跡にまだ小い蕾が幾つもあつたが、それが果して咲くものか咲かぬものか、判斷が出來かれた。僕はまだ少し咲くかとも思つたが、巧者な人が見てモウ迚も咲かぬと云つた。そして今の中に切つて了つて置けば秋になつて、モ一度花が咲くと云つた。

◎或日ワイフは其ダリアを根本から切つて了つた。僕は其の水々とした青い葉を惜しいとも思つたが、別に反對もしなかつた。秋になつてモ一度花が咲くものならそれも面白いと思つた。

◎それから二三日して『巧者な人』が又來た。そして『ヤア、ひどく切つて了ひましたな』と云ふ。『だつて、あなたが切れと仰たぢやありませんか』とワイフは云ふと、『イヤ、切れとは云つたが、あんなに根元から切つてはひどい』と云ふのであつた。

◎それからワイフも僕も、首尾よく芽が出るか知らんと氣遣つて、毎日其の切株を見て居たが、何の見んごと元氣な芽が吹きだした。そしてズン／＼大きくなつた今ではモウ一尺以上の高さになつて居る。是ならキツト花が咲くと云つてワイフは喜んで居る。

◎然し僕の小庭は日あたりが悪い。果して花が咲くものかどうか、僕は樂みながら猶少しく危ぶんで居る。

◎先達てから疊の上に蟻がやつて來て仕樣がない。幾ら箒ではきだしても直ぐに又やつて來る。片腦油の霧吹で攻め立てゝ見たが、それでも一向に驗が見えぬ。仕方が無いから閾の溝を傳つて來る奴を二三疋、指の先で押殺して見た。サア跡から來る奴が驚いた。死骸にブツつかつてビツクリ仰天して、早速全速力を以て背進する奴がある。然し中には勇敢な奴がある。少々躊躇したり、用心したりするが、死骸の側を通りぬけて矢張り前進する。中には一時大分狼狽する奴もあるが、それでもまた前進を思ひ止まらうとはせぬ。

◎いよ／＼仕方がないから今後は來る奴、來る奴片はしから皆殺しにした。死屍が累々として百ばかりも閾の溝に積まれた。さすがの蟻軍も是には避易して、とう／＼一疋も來なくなつた。僕は成程と感心した。

◎然し是で將來蟻が決して再び疊の上に上つて來ぬかどうか。

妄評多謝

榮

■何にも書かない代りに、と云ふものも可笑しいが、本號の二三の人々の文章に就いて、少々批評めいた事でも書いて見よう。

■堺君の『大杉君と僕』は、いつも僕等の間で話し合つてゐる事なので、僕には少しも珍らしくはない。しかし餘程興味ある問題である。僕が本號に書かうと思つて遂に出來なかつたのも矢張り此の問題だ。堺君のあの表に就いては、『只大体の色別であるから餘り嚴密な意義に解されては困る』と云ふ程度に於て、僕も一致する。僕は只だ、堺君がこんな一般論をする代りに、いろ〳〵な思想の異同、少なくとも堺君と僕との異同を詳細に論じて、更に二人と他の思想界との關係に及んだなら、餘程面白ろかつたらうと思ふ。僕は、いろ〳〵な思想と態度との共通點を見ると共に、又其の越え難い差違點を殊に注意したい。斯う云つた風の一般論は、徒らに大向うの喝采を拍すると共に、特殊の諸事實を知らない無邪氣な人々に、妙な誤解を起させる恐れがある。尤も堺君が結論の形式(?)で、堺君自身及び僕の行動を批評した事に就いては、僕は別に異議も辯解も申立てない。僕自身も『一つはそう云ふ理由から』だと思つてゐる。

■『胡麻鹽頭』の中のベルグソン評の飜譯は、どうも僕には眞面目なものとして受取れない。堺君は、ベルグソニズムなりサンヂカリズムなりに就いても、其のオリヂナルのものを少しも讀んでゐない人だ。從つて堺君はラポポルが只だ正統派社會主義の哲學者だと云ふ所から、全く無批評に其の紹介をしたに過ぎない。

■岩野泡鳴君からは、實はもつと手嚴しい惡口が來るだらうと、豫期してゐた。そして案外つまらぬ惡口なので少々失望した。一々駁論する必要も大して認めないが、彌次馬と云ふ事と僕等が岩野君を毆つてやらうと云ふ議案を出したと云ふ事とに就いて、ちよつと書いて見よう。

■彌次馬も結構ぢやないか。僕なども矢張り此の彌次馬で、最初は社會主義へ入つて行つたのだ。社會主義の理窟も何もロクには分らなかつたが、僕等の內心には、是非とも社會主義の彌次馬にならなければならぬ、或る強い要求があつたのだ。そして彌次つてゐる間に、漸次に此の要求の自覺も生じ、從つて此の要求と社會主義との關係も明白になつて來たのだ。最初からえらい自覺をもつて、事を始めると云ふやうな、そんな神樣みたいな人を僕は知らない。誰れでも最初は彌次馬なんだ。生きてゐる事だつて、矢張り最初の十幾年か二十幾年かは、皆んな全くの彌次馬で生きてゐるんだ。更に進んで云へば、恐らくは人間の一生は、彌次の連續で暮らされるのだ。そして此の彌次心の最も強い、且つ其の彌次心を自覺しつゝ、それを正直に最も善く滿足させるものを見つけた奴が、本當のえらい人間になるんだ。岩野君にも隨分彌次心はある。彌次馬を以て自ら任じてゐる僕なぞよりも、まだ〳〵餘程の彌次馬だ。そして岩野君は自分の彌次心を本當に自覺してゐない。且つ岩野君は半自覺の其の彌次心に、『利口な應用を利かせて』ゐるものだから、個人主義的國家主義などゝ云ふ、妙に『徹底』したものにそれを結付けて了つたのだ。

■僕等の間には、岩野君を『なぐつてやらう』などゝ云ふ『議案を出した』事は甞つてない。それは只だ、僕が戯れに、上司小劍君に話したに過ぎない。『あいつは文壇の野蠻人ださうだから、あいつを毆れば僕は

より以上の野蠻人になる。そして其事が新聞にでも出れば、僕はあいつより偉いと云ふ事になる』と云ふやうな意味の事を話したのだ。それを、あのいたづら好きの上司君が、岩野君に話したのだらう。其後僕は、岩野君があちこちで此の話をしたのを、聞いた。そして僕は、岩野君の甚だ無邪氣な事を、笑つてゐた。然るにこんどは殆んど二年近くも過ぎた今になつて、直接に岩野君から此の怨みごとを聞いた。そして僕は、あんなちよつとした戯談から、永い間岩野君に妙な感じを抱かせてゐた事を、甚だ御氣の毒に思ふ。

■上司小劍君は『別に原因を考へて結果を究はめようと』せず、『只眼前の事實を語る』人である。そして其の語る『眼前の事實』なるものが、如何に皮相であるかを少しも氣づかぬ人である。斯んな人と議論をするのは無駄だ。

■しかし上司君とても、そんなに分らない人ではない。彼れは兎角にいたづら好きの癖をもつてゐる。そして僕等があんまりムキになつて何かやつてゐると、時々傍からいやがらせを云つて、獨りで喜んでゐる。しかし永い間の交際のお蔭で、僕はもう此の手には乘らなくなつた。けれども矢張り賣り言葉に買ひ言葉で、何か一言位は云ひ返してやりたい氣がする。

■上司君の忠告がなくとも、僕等は溝ざらへをやる。しかし『餘り喧しく騷ぎ立てられて、晝寢の妨害をされては』などと云ふ贅澤は聞いてやらぬ。上司君のあの見るさへ『他人に嫌惡』を催さすブク／＼したからだも、溝泥と一緒に、何處かへさらへ出してやる。上司君の一生が『もう僅か』だらうが長からうが、そんな事は僕等には容赦はない。

■久津見蕨村君は、平常の蕨村君にも似合はぬ、妙な事を書いたものだと思ふ。久津見君は、自分を、又一切の人間を、只だ臆病なものとしてのみ見て了つた。そして此の所謂事實に基いて、其の議論を進めた。事實に基いて議論をする事に素より異論はない。しかし其の事實の穿鑿には、之れも素よりの事ではあるが、餘程意を用ひなければならぬ。然るに久津見君は、人間と云ふ復雜なる生物の、その又復雜なる心理作用を、只だ臆病と云ふ一事實にレヂユウスして了つた。此處に久津見君の議論の根本的誤謬がある。

■久津見君と雖も、決してそんな臆病のみの、意氣地なしではない。あれでも昔し、信州か何處かの教育會の講習會で、教育勅語か何かの批評をして、講壇から引きづり下されたとか下ろされそうとしたとか云ふ事實のある人だ。幾度か其の著書の發賣禁止を食つて、猶且つ屈せずに、同種類の著書を出す人だ。睪丸炎で死にかゝつた事のある記憶のまだ鮮かな中に、平氣で女を買ひに行く人だ。久津見君は決して臆病ばかりの人ではない。

■僕等とても同じ事だ。臆病は僕等の事實である。しかし勇氣も亦同樣に僕等の事實である。僕等は少なくとも此の二つの事實を基礎として周圍の事情を考察しつゝ、僕等自身の行爲の批評もし、又理想も建てなければならぬ。

■僕には、女も可愛く、金も欲しく、うまい物も食ひたく、そしてそれと同時に、向う見ずに猛進する事が、そう大した矛盾でもない。即ち人間として生きながら、所謂人間らしからぬ行爲に出で得る。

■妄評多謝。

新刊讀後

義英

■ストリンドベルヒ

（加納作次郎執筆）

自ら云ふごとく、『文藝の作品の背景を知りたいと云ふ要求』を滿たすために現はれて呉れた叢書の第一編である。是は御世辭でなく私等初學者にとつて悅しい企てである。元より私に此の書以外にストリンドベルヒに對する創見も批評もある筈はないから此の書から得た感銘とそこから少し推察を廻はした事を書くに止まる。

一、彼は他の天才者の爲た、多數者の內生活を一身に經驗する事において、他の在來のそれより更に多面多角を網羅した。

一、彼はイプセンの持たなかつた三つのものをもつてゐた。『音樂と花と子供と』。

一、彼の理性は『大抵の人のそれよりも一層明晰であつた。而もなほ內から湧いて出る情緖の壓迫を抑制するに不充分であつた』。

一、彼の作中の主人公の言に『君は凡てを肯定する事によつて生活を始めた。そうして凡てを否定する事によつて生活をつゞけて來た、もうそれを同等において、それでよし給へ。排他的である事をやめ給へ。此か彼かと云はず兩方ともと云ひ給へ』と云ふのがある。

以上の諸項によつて私は彼に對する幾點かのまとまつた云ひ方や、彼の著しい特質を知る上の暗示を得た。（定價五十錢、神田錦町一丁目中興舘）

■ドストイエフスキイ

（瀨戶義直執筆）

近代評傳叢書第二編である。同書はド氏の全体について廣く評傳してあると雖もトルストイとの比較に力が入れてある事は判る。トルストイが其生活中に常に最善最眞と云ふ方向を見出してはそちらへ急ぎ乍ら比較的薄い効果に終つたに反しド氏はかゝる意識の比較的些なかつたに反して大きな効果をあげたと云ふにある。乍然之はトルストイのかゝる傾向をもつと主觀的に是非を明言してから論じて貰ひたかつた。私は自分の生活の對社會的効果をぼんやりしてゐる人（偉い人で）の價値を、更に存在を疑ふのである。一体此の著者のト氏ド氏觀は前者がより早く世間に廣まつたと云ふ先入主を脫しきらず不徹底な箇所も私には目についた。

私が他面においてドストエフスキイを畏敬するとしても、以上の比較は著者の計畫と反對の結果を私には與へた。（定價同上、發行所同上）

■飼山遺稿（故山本一藏遺著）

早大在學時代と中學時代との日記があるが、私は中學時代の日記に多く興味をもつた。之は自分のその時代に比して故人が非常に優秀であつたと云ふ驚きのためかも知れないが、然かし大學時代が中學時代より發達し熟した徑路を見出し得なかつた。

故人は何故に死んだか？と云ふのが此の書の大いなる興味である。これについても諸氏の意見を徵して、堺氏のごとくあまりに外界の條件を過大視して故人その人の心理を解剖し推察するに鈍かつたのも、故人の親友の或人のごとく死てふ事實に無意識的に幻惑したのも見出だせた。

故人の心持ちが極めて短く時間的に潮來し轉換した事はその日記によく示されてゐる。例せば白晝には心を落ちつかせ得て外界に對して或る讓步を恕すつもりになる。するさ外界はその部分的改宗を容れない、

そのうちに夜が來て社會は暗黑で塗抹されてしまふと、白晝の行爲に悔が起つてくる。それは直ちに先に增した自己執着を呼ぶ。——そう云ふ事が繰りかへされた結果故人の先天の性は終にその夜の氣分に勝利をあげさせた。

日記に現はれた故人はまたお世辭が好きであつた。故人が幸德氏より石川三四郞氏や木下尙江氏と親しんだと云ふ橋浦君の言、山路愛山氏の論文を感服してゐる所などは私によく御世辭好きの斷言を强ひた。

私が故人に希望するのは『相互扶助論』執筆中の氣分の發展と永續である。そこに故人の生活は善い具体化が始まりはしなかつたか。（定價一圓、神田表神保町泰平舘）

■底の社會へ（小川未明著）

私は此の作者の前の作で『響』と云ふのを讀んで、好いと思つた。あれは小さく心持よく構成されて隙がないと云ふ感じがあつた。此大冊『底の社會へ』の中には私はあれのやうな物を見出せなかつた。此うちの大部は作者が、事件を無視する事を殆んど極度までやつた。作者は何か一つ云はふとする事を見出すとそれに執着して、それを包含させる事件の選擇を輕んじてしまつた。ために書き出しが大げさな割に讀者は大抵事件の平凡に終るのに失望する。又は作者は云はんとする所、訴へんとする所と事件との間に渾融が成つてゐないのがある。

二十七編の短篇中『底の社會へ』は私の心を引かれた作だ。が引かれたのは作の全体からではない。若くば作そのものからではない。最後の六行、即ち『私は筆を下において考へる』から『その時は行くのだ、自由と快樂の多いどん底の社會へ！暗い底の社會へ！』が私にはぼんやり他人事と眺めてゐられない强迫を感ぜしめた。作者が他人事と眺められなかつたと同じく。然かし此の作者なども其の部分以外は何の印象もなかつた。私は作者がもつと取材の點をも自己のうちに求めたら、などと考へた。

それから用語や句で極度に目についたのが私にはあつた。『物悲しい秋』『可成人生と云ふもの にもまれて 來た』『道ならぬ誤解』などである。又『彼は家を疊んでしまつた。而して居所も定めず漂浪をつゞけるやうになつた』などの敍述もあまりに抽象的で何だか『雨月物語』でも讀んでゐるやうな心持がした。（定價一圓卅錢、淺草柳橋通岡村書店）

■死者の街より（田代倫著）

『その人自身にとりては薄命を甘んじても『文明上かくれた天才をそのまゝに過すは大なる損失である』が故に出版された『無名作家叢書』第一編である。短篇集である。『惡魔の傳道とその報告書』の緖言に曰く『奈何に不徹底で無神經なお前達でも、もう大抵今日の小說には愛憎を盡かしただらう、そこで深切な俺は讀物をもたないで困るお前達のために此の一篇の小說を書いた……尤も入らない奴は强ひて受取らなくても好い』

私はまだ今日の小說に愛憎を盡かさないから先づ此の一篇を受とる資格がない。又愛憎をつかす日が來たとすれば、此の新しく惠まれた數篇は盡かすまで忍耐できまい。作者は此の一卷によつては私に何等の建設をも示さなかつた。（定價五十錢、牛込早稻田鶴卷町菊屋出版部）

血の裁判

（ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲「織工」より）

小山内　薫

この土地に一つの裁判がある
判決の申し渡しもしないで
直ぐと命を取つて了ふ
秘密裁判よりもつと惡い裁判だ

この土地では人間がぢり／＼と苦しめられる
この土地には拷問室がある
この土地では吐息が哀哭の
證據として拂はれる

ドライシガア一家は絞首役だ
家來は捕縛吏だ
どいつもこいつもひどく人を苛めて
何事かを隱す爲に

汝、惡人、惡魔の子孫
地獄の魔王
汝は貧乏人の財産を食つて生きてゐる
汝の貰ふ報酬は呪だぞ

願ひも頼みもこゝでは聞かれない
訴へて見ても迚も無駄だ
「氣に入らなければ、出て行け
そして飢え死にするが好い。」

パンのかけら一つ家に無い事のある
貧乏人の苦しみと
悲しみを思へば、誰だつて
慈悲の心が動く筈だ

慈悲は美しい感情だ
だが、汝等人食ひ人種には分かるまい
汝等の目的は既に知れてゐる
貧乏人の肌着から肌まで剝いて了はうと言ふのだ。

―一九一四、八、二六―

母

徳永保之助

あ、お母さん、どこへいらつしやるのです、
こんな日暮れに、
しかもはだしで。

あゝお前かい、
久しぶりだつたネ。
わたしは今教會へ行つて來ました、
これからお前の家へ寄らうかと思つてたところ
なのです。

え、教會へ、
お禱りに。

いゝえ、
教會と縁きりに。

え、絶縁のために。
そうです。
この前教會へつれて行つて呉れるやうにお前に
お願ひしたのは、わたしが間違つてました。
わたしはあの時まだ地上の夢がさめないため、
神と云ふものがあると思つてました。
ところがこの頃自分以外にそんなものの無い事
を悟りました、
若し神——そんなものがあるとしたら、それは
自分自身だと思ひました。
またあちらの世界では、人間は在るがまゝで神
にひとしいものとされてゐます。

そうですか、
よくわかりました。
それではお母さんはあの當時のわたしのおろか
さをモウお責めなさいますまい、
それでわたしも安心しました。

お前なにも心配する事はもともとありはしな

い。

お母さんのめし物はすき透つて眞白いそして大へん長いものですネ、

お寒くはありませんか。

ちつとも、——

あちらではみんなこれなんです。

お母さん、そんなに早くおあるきになつて、

あ、あぶない、

モッとゆつくりお歩きなさい、お母さん、

だんだん暗くなつて來ましたから。

なあに大丈夫だヨ。

あちらへ行つてから、わたしは急に大そうじやうぶになつたヨ。

それもその筈さ、空氣が非常に澄んで淸いのだからネ、

そして百合の花のやうなにほひがして。

そんないゝ所なんですか、

あゝそれを聞いて安心しました。

あちらでもやッぱりお母さんは年中病氣でねてゐやしないかとわたしは心配してました。

お前覺えてるかい、

一体わたしは何日あちらへ行つたのかネ、

すつかり忘れて了ひました。

え、四年まへ、

あゝモウそうなるかネ、

そしてその間お前の身の上に、別に變りは無かつたかい。

お母さん、安心して下さい、

どうかかうか、その日〳〵のパンにだけは事をかゝしませんから、

やつぱりわたしは以前の會社へ毎日出て居るんです。

そしてお前は何か特別な希望をいだくやうになりましたか、

また何かお前のかうと思つたことを果しました

か。

い丶え、何にも、お母さん、
どんな希望のかけらも持つてません、
今云つた通り、生活の方がせツぱつまつてるので。

あ丶モウ何も云ふぢやない、
それ以上わたしはききたくはありません。

あ丶、お母さん、あなたは子供をつれてますネ、何處から連れて來たんです、
誰の子です、
實に良い子だ、
可愛らしい子だ。

この子かい。

實によく發育して、賢こさうで、そして可愛らしい、
やッぱりお母さんと同じやうなきものをきてますネ、

あ丶お前さはつてはいけないヨ、
この子はわたしの子なんだヨ。

え、お母さんの、
どうしてお母さんは、
お母さんはそんなお年ぢやないぢやありませんか。

お前は何にも知らないから、――
あちらではお前地球上の人間に子種の全くつきる年でも、決して子供の出來ないことはないのだヨ、
そしてそれは少しも苦痛で無くなつてゐるのです、
ご覽、
お母さんは少し肥つて、若々しくみえるだらう、
あちらへ行けば誰でも自然いくらか若く美しくなつてしまふ。

そう云へば、ほんとに、――

そしてあちらの子供はみんな斯様に立派に育つて、可愛らしいのですか。

そうです、

あちらの子供は皆な書にかいた天使みたやうです、それは次の時代を準備し、更にそれを完くし、光輝あらしめるために、大事に〳〵そだてられます、

この子は、お母さんいくつです、

あヽお前この子にさはつてはいけない、

この子はこれで三歳です、

え、三歳、

何て大きいんです、

この子が大きくなつたら、

それこそ形體に於ては、言葉通りにあの超人になるでせう、

あちらではこれ位はめづらしかありません、

モウあちらの世界はすべてすぐれた者のみのあつまりです、

からだばかりぢやない、

たましひも太陽のやうです、

孤獨で、創造的で、絶大で、强烈で、

あヽ實に、

お母さんの住んでる世界は何て偉大なんでせうか、

僕も、――

あヽお母さん、わたしの家はモウついそこです、

さうかい、

けれどわたしは寄つて行きません、

わたしはお前たちのおろしい、まづしい、醜い生活の有樣などをみると、情けなくなつて泪がこぼれます、

けれどわたしにはモウどうすることも出來ません、わたしの世界はお前たちの住んでる世界とは全く別々だから、わたしはこのまヽあち

らへ歸ります。

そうおつしやらずに、お母さん、
い、い、
あちらの世界のお話しをモッときかせてください。

いゝえ、わたしはモウ歸らねばなりません、もしかするとわたしはモウ之れきりで、お前に逢ひに來ないかも知れないヨ、教會とも絶緣したから、その外モウ何のかゝはりもお前たちの世界とは無くなつたから。

どうかそう仰有らずに。

いゝえ、
さよなら。

お母さん、一寸おまち下さい、
お母さんはどちらの道からかへるのです。

別に道はありません、
い、い、
どつちからでも歸れます、
私のあるくところには、あとに自然道が出來ます、
然しその跡はこの世界の人たちの目には見えません。

さよなら。

お母さん、
その子を置いて行つていたゞけませんか。

い、
さんでも無い、
この子を置いてけば、空氣のわるいためにすぐ死んで了ひます、
一刻も吸ふのを止めないから一番大切なのに、お前の世界の空氣は、いまにも窒息しそうです。

そうでせうか。

たゞお別れに一言お前に云ひ殘しませう、

お前はモッと深く人間を愛さなければいけません、
それでは、——
わかりました。
それでは、お母さん、
可愛らしい子供よ、
さよなら、
あゝモウ見えない。（をはり）

■

奮闘努力！

安成二郎

野依秀一氏の使用人となりしより、
之を標語とし、自ら嘲る。

溝泥

——上司小劍、三拜して讀め——

寒村

おい、目黒村のヱセ賢人　小劍！
お前は俺達を溝浚ひと冷かしたり、
勞働者を臭いの、汚ないのと惡罵して、
それで大分いゝ心もちで居るやうだナ。
月給の一圓でも多い奴等にや、頭の上らぬお前には、
そんな事がせめてもの心やりなのだらう、可哀そうに！。
然し、俺達に浚はれる溝泥が、お前自身だとは、
お前達の仲間だとは、
いくら利口ぶつても、猿智慧では解るまい。
お前達、及びお前達の主人等を除いて、
俺達の浚ふ溝泥は無いのだ。
それを知らずに晝寢をして、
靜かにやつて吳れなぞと澄まして居るのは、
火へかけられた螺蠑(さゞえ)が、
殼(から)さへ蓋(ふた)しときや安心と思ふも同然、
それこそホントに笑止、笑止、アハハだ。
然し安心しろ、お前達見たいな奴等は、
なるべくソツと浚つてやるから。
解つたか、文壇のデモ大家、社會の溝泥メ。

名判官

アナトル・フランス
大杉　榮譯

彌次馬や二三の辯護士等は、判決文の朗讀がすむと傍聽席を出た。書記はもう他の事件の被告を呼んでゐた。出て行つた人々は、あまり面白くもなかつた此のクレンクビユの事件に就いて、少しも考へず、又思ひ出してみもしなかつた。たゞ偶然此の裁判所に來てゐた銅版師のジャン・レルミツトのみは、其の今見聞きしたばかりの事に就いて、深く考へこんだ。

彼れはジョゼフ・オオバレ辯護士の肩に其の手をかけながら云つた。

『ブウリシユ裁判長のえらいのは、無益な好奇心を避けて、一切を知らうとする智識的傲慢を謹むに在る。マトラ巡査とダボド・マテイウ醫士との矛盾した陳述を對立させれば、裁判官は疑惑と不審との外はない道に入つて了はなければならぬ。批評法の規則に從つて事實を調査すると云ふ方法は、うまく裁判をすると云ふ事と一致するものでない。若し裁判官が此の方法に據るやうな不謹愼をすれば、其の判定は、多くは、區々たる其の個人的聰明と、及び人情の常なる弱點との上に係つて來る。こんなものに何の權威があるだらう。歴史法などゝ云ふものが、其の必要とする確實を得る爲めに、全く不適當である事は爭ふ事が出來ない。これはワルタア・ロオレエの事を思つて直ぐに分る。

倫敦塔に幽囚されてゐたワルター・ローレーが、いつものやうに其の世界史の第二編を書いてゐた或日の事、其の窓の下で喧嘩が起つた。彼れは喧嘩をしてゐる其の人々を見に行つた。そして再び其の仕事に取りかゝつた時、彼れは隨分よく其の人々を觀察して來たと思つてゐた。然るに其の翌日、其の喧嘩の場所に臨み且つ其の仲間入りまでした友人の一人に、此の事件を話すると、彼れは有らゆる點で此の友人に反對された。そこで彼れは、其の眼前に在つた事すら間違うやうでは、とても遠い出來事の眞實を知る事の困難なのを思つて、其の歴史の原稿を火中に投じて了つた。

若し裁判官等がサア・ワルタア・ロオレエと同じやうな細心な氣をもつてゐたら、彼等は其一切の記錄を火中に投じて了ふに違いない。しかし彼等には此權利がない。これは彼等にとつて裁判の拒絕、即ち犯罪である。知る事は斷念しなければならぬが、裁く事は斷念する事が出來ない。裁判所の判決が事實の組織的探究の上に據る事を望むものは、危險なるソフィストである、普通裁判と軍事裁判との不届千萬なる敵である。ブウリシュ裁判長は、道理や科學の如き其の結論が永遠の討論に附せられるやうなものに、其判決を據らしむべくあまりに裁判官的精神をもつてゐる。彼れは、其の判決が敎會の命令と權威を等うするやうに、それを獨斷の上に基かしめ、又傳說の上に築かしめる。其の判決は聖會法的である。これは、神聖侵す可らざる聖會法の或物の中から、其の判決を拔き出して來ると云ふ意味だ。譬へば彼れは、證言の甲乙をきめるのに、眞實か假實とかと云ふやうな不確かな欺し易い性質に據らないで、內容的な、不變な、そして明白な性質に據る。彼れは證言を武器の重さとかけ較べる。これよりも單純なそして同時にこれよりも賢明な方法が他にあるだらうか。彼れは一巡査の證言を疑ひのないものとして採用した。しかも其の巡査たる、人間性を除き去られて、只だ一番號として、且つ理想的警察官の範疇に從て、形而上的に想像されたものである。コルシカのチントモンテに生れたバスチエン・マトラには過失のあるべきものでないと彼れに見えたのではない。彼れは、バスチエン・マトラが大なる觀察力をもつてゐるものとも、又事實を調査するのに嚴密なそして正確な方法を施したものとも、決して思つてゐなかつた。實を云へば彼れは、バスチエン マトラを見てゐたのではなく、只だ六十四號を見てゐたのである。彼れは人間には誤りのあるものだと思つてゐた。ピエエルやポウルには間違があり得る。デカルトや、ゼセンディや、ライブニツや、ニユウトンや、ビシヤや、又はクロオド・ベルナアルにも、間違はあり得た。吾々は、皆んなそしていつでも、間違う。吾々が間違をする理由は數限りなくある。先づ感官の感覺や腦髓の判定は、迷想の源泉である、不確實の原因である。されば一人間の證言は信用する事が出

來ない。Testis unus, testis nullusである。しかし一番號には信用を置く事が出來る。チントモンテのバスチエン・マトラは間違をする。しかし其の人間性を除き去つた六十四號の巡査は、間違をする事がない。これは一本體である。本體は、彼の人間の中に在つて其の人間を攪亂せしめ腐敗せしめ又瞞着せしめるやうなものを、其の中にもつてゐない。本體は純粹である、不變である、混氣がない。斯くして裁判所は、一人間に過ぎないダギド・マティウ醫士の證言を退けて、六十四號の巡査の證言、即ち神の光が法廷に降つて來たやうな純粹の觀念を採用する事に、些かの躊躇する所もなかつたのである。

　ブウリシユ裁判長は、此の方法を以て、裁判官の望み得べき唯一の、一種の無錯誤を確める事が出來た。證言をする人が劍を帶びてゐる時には、其の人に聞かずして其の劍に聞かなければならぬ。人間は卑しむべきものである、間違のあり得るものである。けれども劍は卑しむべきものでない。常に道理を持てゐるものである。ブウリユ裁判長は深く法律の精神を究めてゐた。社會は力の上に立つてゐる。力は社會の貴むべき基礎として尊敬されなければならぬ。裁判は力の實施である。ブウリシユ裁判長は六十四號の巡査が元首の一分身である事を知つてゐた。元首は其役人の各々の中に在す。六十四號の巡査の權威を破壞するのは即ち國家を弱める事になる。ボツシユエが其の崇高なる言葉を以て云つた如く、薊の葉の一枚を食ふのは、其の薊を食ふのである。(Politique tirée de l'Ecriture sainte, passim.)

　一國家の有らゆる劍は、皆な同じ方向に向けられてゐる。それを互ひに打つかり合はせれば、共和國は破壞されて了ふ。これが、被告クレンクビユの、六十四號の巡査の證言によつて、今十五日の禁錮と五十法の罰金とに處せられた所以である。私は、此の判決を授けた美はしい大いなる道理を、ブウリシユ裁判長自ら說明したのを聞いたやうに思ふ。私は彼れが斯う云つたのを聞いたやうに思ふ。

「私は六十四號の巡査に遵つて此の男を裁判した。それは此の六十四號の巡査が國家の力の分身であるからである。私の此の聰明を認める爲めに

は、私がこれと反對に行動した時を想像すれば十分である。諸君は其の不條理な事が直ぐに分るだらう。何となれば、若し私が力に反對して裁判をすれば、私の判決は實行されないに違ひない。諸君、裁判官は其の背後に力をもつてゐなければ服從されるものでない事に、注意をして戴きたい。若し憲兵がなければ、裁判官は憐れむべき夢みる人に過ぎない。若し私が一憲兵を害すれば、私は自らを害する事になる。蓋し法律の神がそれを許さないのである。强者の武裝を解いて弱者を武裝させるのは、是れ私が其の保存を任務としてゐる此の社會組織を變更する事となる。裁判とは既得の不正不義の裁可である。裁判が嘗つて征服者に反對し、掠奪者に反抗したのを誰れが見た事があるか。不法なる權力の起つた時、裁判は只だこれを合法のものとして認めるの外はない。何事も形式の中に在る。そして有罪と無罪との間は、一枚の印紙の厚さほどしかない。クレンクビュよ、お前は最も强きものであれば善かつたのだ。若しお前がモオル・オー・ヴアシユ！と叫んだ後、自ら皇帝である、獨裁官である、大統領である、或は單に市會議員であると宣言しさへすれば、私は必ず十五日の禁錮と五十法の罰金とに、お前を宣告しなかつたのである。私はお前を無罪放免にしたのである。これは本當の事である。」

ブウリシユ裁判長は確かに斯う云つたに違いない。何となれば彼れは裁判官的精神をもつてゐる。裁判官が社會に負ふ所を知つてゐる。彼れは此の原則を嚴密に保護してゐる。裁判は社會的のものである。これを人間的の有情的のものにしようなどゝ思ふのは、よこしまなる心の人々である。裁判は一定の規定によつて行はれるもので、肌の慄ひや智識の光りで行はれるものではない。殊に此の裁判に對して正義なれと要める事は出來ない。裁判はそれ自身が正義なのだから、敢て正義である必要がない。そればかりではない。正當な裁判と云ふやうな觀念は、無政府主義者の頭の中でなければ萠す事が出來ない。マニヨオ裁判長（譯者註 佛蘭西現存の裁判官にて、名判官の名高き人。マニヨオとは名判官のあだ名である。今は何地よりか代議士として出てゐる筈。）が公平な裁判を與へた事は本當だ。しかしそんな判決は破棄されて了ふ。これが正義なのだ。

本當の裁判官は證言を武器の重さとかけ較べて

見る。クレンクビュの事件にも、其他のもつと有名な事件にも、これは現はれてゐる。』ジャン・レルミット氏は、パ・ペルヂュの法廷を端から端まで歩きながら、斯う云つた。

裁判所の事情を善く知つてゐるジョゼフ・オオバレ辯護士は、鼻の先を掻りながら、それに答へて云つた。

『若し君が私の意見を聞かうと云ふのなら、私はブウリシュ裁判長がそんな偉い哲學をもつてゐるとは信じない。私の見る所では、裁判長が六十四號の巡査の證言を眞實の言葉だとして採用したのは、只だいつも行はれてゐるのを見たまゝ、其のまゝ行つたのに過ぎない。人の行爲の大部分は、其の原因を模倣の中に求めなければならぬ。人は風習に遵つてゐさへすれば、正直な人間として通るものだ。他人のするやうにしてゐる人を、世間では善人と云ふんだ』

——『クレンクビュ』の一節——

■オイケン哲學の批難（古谷榮一著）

今迄何處へも名を出した事のない無名の一青年が、自己發表の第一聲として、恐しい氣焰をあげたものだ。しかし此氣焰は、著者の全身の中に白熱して燃えてゐるそして其の觸れる所の殆んど何物をも燒き盡さればやまぬ、生命の火から出た氣焰だ。僕はまだ、少なくとも日本人の書いたもので、これ程力強いそして底深い、メタフイジカル・スピリツトの發現を見た事がない。僕は此書を讀みながら、僕自身がヒシヒシと壓迫されるのを感じた。

オイケン哲學の批難ではあるがオイケンなどは何うでもいゝ、此の俺を見てくれ、と云ふ風に、著者は殆んど到處に其自己を、『未だ地上に於て曾つて何人もなさゞりし程に強烈に握りしめた』そして『其の正体へ喰ひついた』と『誇負』してゐる自己を、本當に青年らしい仕方で投げ出して見せてゐる。そして此の不意に投げ出された著者の『自己』の前に、僕は周章てゝ壓しつけられて了つたのだ。

これだけの事を云つたゞけでは、勿論讀者には、此書の內容の分る筈はない。しかし僕は今、それを紹介し、若しくは批評する餘裕をもたない。そこで止むを得ず、此の天才らしい著者が僕におつかぶせた壓迫の感だけを記して置く。そして此の偉大らしいメタフイジシアンの出現を見る爲めに、何人も此書を一讀するの要ある事を附記して置く。（榮）（金一圓二十錢、東京神田區表神保町東京堂）

夏

荒畑寒村

……どなたです、……あなたはどなたでございます……。

夢とも無く、現つとも無く、そういふ聲が微かに耳に入つて來た。高岡は誰か自分を呼んでるのかナ、と思つて、眠りから醒めやうとは朧ろに思つたが、腦の中には熱い灰が一ぱい詰つて居るやうで、どうしてもその努力を許さなかつた。それに眼瞼の底に、もう一重うすい膜が張られでもしたやうに、眼は開いたつもりなのだが、世界はやはり何だか薄白い、濁つた靄の層みたいであつた。昨夜は仕事を終つて寢たのが十二時過ぎ、彼是れ一時近かつた。それからついトロトロとしたゝけだつたが、一体もう遲いのか、それともまだ早いのかしら。ア、眠い、心が深い地の底へでもメリ込んで往くやうだ―高岡はボンヤリそう思ひながら、ドタリと懶そうに寢返りを打つた。

……居りますが、あなたはどなたですと聞いてるのです……。

おとりの聲だ。誰か來たのかしら、誰か今日來る筈だつたかしら。高岡はまだすつかり眠りからは醒めなかつたが、やうやく意識が些しづゝハッキリして來たのが解つた。『あなたはどなたです』と、いまおとりの聲がして居たやうだつたが、知らない人で今日來る筈の人があつたかしら。高岡はまだボンヤリして居る頭で、一寸そう思つて見たが、自分にもどつちとも解らなかつた。熱い灰の詰つてるやうな腦の感じは、まだ彼れに何でも無い考へさへも禁じて居た。

……私しは、S――署のものでございまして、高岡さんがもし御在宅でございましたら……。

男の聲でそう云ふのが聞へたが、それはまるで、酷い寒さに凍へて居るか、で無ければ、非常に飢えてゞも居るやうに、恐ろしく慄へてゐた。『S――署の者』と聞いて、高岡はハッと思つた。そして靜かに顏だけを上り口の方にふり向けて、初めて眼を大きく見開いた。裾の方の蚊帳の釣手が、兩方とも外されてあるので、蚊帳の天井はう

つとうしいほど、顔に近く垂れ下つて居た。障子や襖を悉く開け放してあるので、狹い家の中は入口から見透しだが、襷がけの儘後向きに立つて居るおとりの姿で、どんな人間か、男の姿はよく見へなかつた。

『へえ、何か御用ですか、主人はまだ寢んで居りますが。』

切口上に、然し丁寧では無く、おとりが問ひ返すと、男はますます慄え聲で、

『ハッ、實は○○の井上×××から電話でございまして、今日の午後二時までに、お出でを願ひたいといふ事でございますが……。』

『あゝ、さやうですか。……あなた、あなた、S――署の人が來ましたよ。』

おとりは蚊帳の外から、高岡の枕許に膝をついて、聲を低めながら云つた。

『わかつてる』。

彼は仰向いた儘、身動きもしないでおとりにこう云つた。そして上り口の方に向つては、

『よろしい、二時迄に行くと云つて呉れ。』

『へッ、さやうでございますか、畏まりました。……どうも失敬いたしました。』

男はやつぱり慄え聲で、おとりに挨拶すると、慌てゝ出て行つた。高岡はもうまつたく醒めて居た。体を動かすと、布團の裾の方が、垂れた蚊帳に觸れて、その度に蚊帳にとまつて居る蚊の群が、微かな唸り聲を立てゝは舞ひ上る。その聲さへも耳にしみるやうに聞へた。おとりは、『マア、大變な蚊ねえ。あなた、うつとうしいでせう。蚊帳を除りませう、ね。』

そう云つて、枕許の方から蚊帳を外しにかゝつた。蚊帳の裾が、心地惡しく顔の上を撫でゝ過ぎた。吾が家の軒先と、塀越の隣りの家根との間から、僅かに窺がはれる空の色は、白く爛れたやうに輝やいて、瀑布のやうに空間を奔下する八月初めの日光は、楓の葉にも、から松の葉にも、向日葵の花にも、庭一面の青苔の上にも、塀越しに見ゆる百日紅の花や、蒼梧の葉の上にも洪水のやうに漲ぎり渡つて居た。高岡はやつぱり寢た儘、椽先を越して、眩しい迄にギラギラ輝やく庭をマヂマヂと眺めながら、S――署の巡査の云つて往つた言葉の意味を、默つて考へて居た。一たん臺所

に引つ込んだおとりは、再び茶の間に出て來て、長火鉢の前へ座つて煙草を吸ひ付けた。そして高岡に對つて、

『ねえ、あなた。二時迄に○○○へ來て呉れなんて、一体何んでせうね、雜誌の事なら山田さんを呼びに來そうなものですしサ。……ほんとに心配になつちまふネ。』

『別に何も心配するにや當らないよ、また呼び付けて叱言でも云はふつてんだらう。』

『でもあなた、何か叱言を云はれるやうな覺へがあつて？。』

『叱言なんてえものは、大低云ふ方に覺へがあつて、云はれる方にや一向覺へが無いものだ。フ、、、、。』

彼は自分の警句じみた返事に一寸苦笑したが、然し胸の中では、『到頭來やがつたナ』と思つて居た。それは此數日間、今日は來るだらうか、明日こそは來るに違ひないと、毎日のやうに、或る不安をもつて――然し恐怖といふ程の者を感じてゞはなく――待ち設けて居た處であつた。それが遂に來た。當面の不安も、今後の運命も、今日の午後二時になれば、はつきり定つて了ふのだ。『然し、何故午後二時迄と云つたのだらう。何故、いますぐ引致して往かないのだらう。何故二時迄と云ふ餘裕を與へたのだらう。それ迄に、若し俺が逃げて了つたら、どうする積りなのだらう。』高岡は庭の面を移る日差を眺め乍ら、汗ばんだ額を枕に深く埋めた儘、心の中で獨りその意味を問ひ詰めて居た。『二時迄に』、その語の意味が、彼にはどうしても解けない謎のやうに思はれた。確かにその語の裏には、何か解かなくてはならない意味が籠つて居る！。『それとも？』、彼はフト思つた。凝視して居た一點が、瞬間に他の點に變つたやうに――。『送つたのは俺だといふ事は解つても、あれを作つたのが誰かといふ事は、まだ解つて居ないんだ。只だ水野の處で、――或は渡邊の處ででも――あれを悉皆押收した際、俺から送られたといふ事を聞いたのだらう。それで、けふ俺を呼び出して、更に作つた人間を取調べやうといふのだらう。……然し待てよ、N――市で押收された際、恐らく奥付が付いた儘だつたらう。そうすれば、俺だといふ事はすぐ解る。それに水野の手紙にも、

『貴兄の身邊、何とも心許無く』云々とあつた位だから、先づ十中八九迄は、そうと見なきやならん。だが、そうとすれば、水野の手紙は先月の二十九日に來たのだから、それから一週間も、何の音沙汰も無かつたのがおかしい。そして今日になつて、やつと二時迄に來て呉れなんて云つて來るといふのは、どうも不思議だ。して見ると、やつぱり、單に發送者としてより外、解つて居ないのかしら。』時計は七時を報じた。けれ共、彼は起きやうともせず、空虚な眼を大きく開いた儘、三岐にも四岐にも分れた迷路を、彼方に走り入つては突き當つて馳せ戻り、此方へ駆け込んではまた何時か舊の道へ返り、神經の痛くなる程、想像と判斷をコキ使つた。が、到頭しまひには、やつぱり如何しても一切が知れて了つて居る、そして今日迄放つて置いたのは、單に一層確實な證據を握る爲めと、二時迄に來て呉れと云つたのは、成るべく事を荒立てず、愈々といふ場合迄は、靜かに扱はうとするに外ならない。いや、現にあゝは云つて來たものゝ、俺が家を一足出ると、刑事や巡査が大勢待ち構へて居て、〇〇〇へで無く、すぐS――署へ引致して了ふのかも知れない、――といふ點が、如何しても動きのとれない處のやうに、思ひ込まれて了つた。

　そう思ふと、高岡は急にこうしては居られない氣がして、平生の床離れの惡いのには似もやらず、慌たゞしい、そして胸に何か悶へてゞも居るやうな、重苦しい感じを抱いて起き上つた。そうして、急いで顔を洗ふと、何時もは何を措ても新聞にとりかゝるのに、すぐ飯の膳に向つた。彼は冷靜に自分の心を客觀しても、多少の不安の念の外は、別に恐怖といふやうな感は抱いて居ないにも拘はらず、やはり飯がうまくなかつた。輕く二杯、それも後のは茶を灌いで流し込むやうにして、そこ〳〵に濟ませて了つた。おとりは彼がさり氣無く、ハグラかすやうにして居るにも拘はらず、心配らしく眉を顰めて、始終唇を痙攣的に顫はせて居た。が然し、夫のいつが日にも甘そうに朝飯を食つた事が無いのを知つて居るので、今朝の少食を、特に深く怪しみもしなかつた。高岡は茶を飮みながら、一亘り急がしく新聞に眼を通して了ふと、また昨夜の仕事の續きに取りかゝつた。それ

心配して居た。どうせ分つて、苦しまなくてはならない迄も、些しでも多く苦しむのは、おどりにも可哀さうであり、またそれを見る者も辛いからであつた。で、茶の間の方で何かして居るおどりには、成るべく氣どられないやうに、初めの言葉を囁やくやうにして云つた。そして、書き終つた分の原稿をいぢりなどして居た。

『ウム、今日の二時迄に來て呉れつて云ふんだがネ。解つて居るとすると、どうも少し手溫いやうじやないか。』

『まだ解つてないんじやないか、只だ發送者が君だといふ事だけ、向ふに擧つてるのじやないだらうか。』

『サア、かとも思ふんだがネ。然し、O――市で大分探して居るといふ記事が、×××新聞に載つたのが、先月の末の事だらう。それからつい先達て、N――市の水野から手紙が來て、その日の朝、すつかり押收されたと云つてよこした。どうして解つたのかネ、何でも東京から通知があつたと云つたさうだが、平素から目指されてるから、屹と鎌を掛けられて、巧く陷つたのだらう。で、そんなだとして見ると、僕だといふ事は解つてなくちやならん筈だ。少くとも、それから四五日も經つ間には、僕だといふ事の證據が擧つて居るべきだ。それが、こう悠々閑々としてるから、少し面妖だと思ふんだ。』

『全く、どういふつもりか、一寸解するに苦しむね。……二時迄だつて。じや、僕は是れから醫者へ往つて歸りにM――ネ、彼處で待つて居やう。往く前に、一寸寄つて呉れ給へ。ア、それから何も用心だ、萬一の時に差入れる本を書いてゝも置き給へ。』

山田が出て行つてから、高岡は急に思ひ出したやうに、原稿紙へ後から差入れるべき書籍の名を記し始めた。薄い紙綴の書籍なぞは、讀み應へのあるやうに一冊に合本して貰ふ注意もした。『本の買へる時にや讀む暇が無く、讀む暇のある時は買ふ金が無い。まア、金のある時に買つといて、牢へでも入つた時に讀むんだナ。』高岡は彼等の仲間內で、よく冗談にこう云つて話し合ふことや、佐野が獨乙語のマルクスの本などを、ギッシリ詰めた本箱を眺めては、いつも『集めはしたが到底も

讀めん、また些し監獄へ往かなくちやダメだ。』と云つては笑つた事なども思ひ出した。彼は書き付けて居る中に、それだけでは、何だか便り無く思はれ出したので、今度は床の間に一杯並べてある本の中から、差し當つて讀みたいと思ふものを選り出して、それを前の方へ一列に並べ始めた。初めは只だ亂雜に、片端から並べて居たが、如何しても氣が落ち着かないので、更に小型の本は小型の本、大型は大型、紙表紙とクロース綴といふやうに、ワクワクと慌たしい心もちであり乍ら、秩序よく並べ變へても見た。

　井戸端へ出て浴衣なぞを洗つて居たおとりが、何時の間にか茶の間に入つて來て、ヂッと高岡のする事を見守つて居た。が、暫らくすると、我慢しきれないやうに云つた。

『あなた、また病氣が起りましたネ。それよりも早く書いて終つて、用事を濟まして來てつから、ゆつくりしたらいゝでせうにネ。二時迄に來て呉れつていふのでせう、もうすぐ十一時ですよ。』

　おとりはまだ心配の失せやない顏色をして居るが、それでも夫の氣紛れな、其癖恐ろしい程夢中になつて居る樣子に、お可笑くて堪らぬといふ風も見へた。然し、高岡はそう云はれたので、また仕事の方が氣にかゝり始めた。そして再びペンを取り上げたが、一度散つた心もちは却々集中できなかつた。ドキドキ、ドキドキと、心臟の皷動のやうに鳴りながら進んで往く時計の針を、ヂッと見詰めた儘、彼は何を考ふるとも無く、永い間持つたペンを動かさずに、默つて居たりした。日はだんだん眞上から射すやうになつて、庭には些しの蔭も無くなつた。喧ましい蟬の聲は何時しかやんで、太陽の熱波は、地上のあらゆる聲を灼き殺して了つた。只だ時々、秋を催ふやうな蟲の音が、何處からとも無く、此の天地の幽寂を縫つて流れた。

　晝飯を濟ませてから後も、高岡は筆が澁つて、獨りヂリヂリして居た。隣の室で小布(こぎれ)などをつゞくつて居るおとりが、時々何か云ひかけても、苦い顏をして返事もしなかつた。それでも、二時をすこし過ぎた頃にはやうやく書き終つて、筆を措くとほつと息をついた。が、固より原稿を讀み返

す暇も、訂正する暇も無いので、彼は冷たい井戸水で体の汗を拭き終ると、着物を改めるのもソコソコに家を出た。尾行がついて來るかとも思つたが、それらしい氣色は一向無かつた。電車の西側の窓は、日が當るので悉く鎧戸が上げてある爲めに、車内は蒸すやうな暑さである。彼は讀みさしのハンタアが近著、『暴力と勞働運動』を讀み續けたが、ソシアリストたる著者の、アナアキズムに對する無理解と、アナアキストに對する偏見とは、極めて保守的なブルヂョアのそれと些しも變らなかつた。彼は徒らに反感と憤激とを增すのみなので、四五頁にして本を閉ぢて了つた。そして靜かに、差し迫つた今日の出來事を考へて見た。彼は不思議に、心がゆつたりと落ち着いて、先程からのワクワクした、慌たゞしい心地が、消へたやうに無くなつたことを感じた。——是は何時お作りでした、いついつでございます。刷つたのは何處です、何處何處です。何處へ送りました、それは云はれません。では配つた先は、それも云へません。何故云はれぬ、何故でも。——そういふ問答がくり返されるだらう、すると、屹と火のやうに怒つて、玆を何處と心得る、云はんと其方の利益にならんゾ、とか何とか、凄文句で脅し付けるだらう。そうしたら、こつちもガラリ態度を變へて、そんなに脅かしたつてダメだよ、云ひたくないから云はないだけサ。僕一個は如何にでもするがいゝ、他の事は一切云はぬ。——そう云ひ切つたら、如何するだらう。豫審でゞも、公判でゞもそう強情を張り通したらどうだらう。永く安逸に馴れた今の身には、二年三年の自由無き監獄生活は、やはり初めてと同じ新らしい苦しさを覺へさすに違ひ無い。けれ共、自分のやつた事なり、入獄なりが、全然徒らに終るとは思はれない。彼の大事件以來、沈頽しきつた運動にも、永い苦しい惡戰に對する苛虐な迫害の結果、全く反動の潮流に掃はれて了つた同志の間にも、多少の刺戟は與へ得ると信ずる。否、此の事そのものが、既に此の反動の潮流から脫れ出でんとする、自分自身の努力なのだ。山田と一緒に、此の秋から創めやうとして居る、新らしい勞働雜誌を思ふと、たとへ二三年にもせよ、自由を束縛されるのは厭だが、然しその爲めに新らしい運動が、却つていゝ結果

を見ないとも限らない。それに自分は或は山田無しに運動は出來ぬかも知れぬが、山田は自分なんか居なくても、獨りでゞも立派にやつて往く男だ。自分は自分の運命を甘受して、それが自分達の理想目的に、間接にもせよ、多少の貢献をなすのを以て滿足しなければならぬ。――彼は獨りで問ひもし、答へもした。爲すべき事を爲して、脫れる事の出來ない最後の運命を、甘んじて受けやうとする滿足な感じ――それは全然運命に屈服して了ふのでは無く、誇りがに手を伸して運命を取る滿足さが、心に充ち渡るのを覺へた。

高岡がH――公園前で電車を降りた時は、電柱の時計はもう三時に間も無かつた。彼は約束した時間よりも、約一時間も遲れた事に就て、微かな不安の念を懷きながらも、すぐ〇〇〇へは往かないで、M――といふカフエの二階へ上つた。山田は其處の、窓から濠畔の柳の並樹を見渡す隅の卓に座つて、煙草とレモン水とをチャンポンに飲んで居た。高岡は山田の傍へ腰を下すとすぐ、煽風器の正面を向いて思ふさま風に吹かれた。彼はグッタリして、眞實に口をきくのも厭な位ゐ疲れて居た。で、給仕の女が來ても、只だ『僕にもあれ』と云つて、顎でレモン水のコップを指したぎりだつた。

『もう醫者へは往つて來たのか。』

『アヽ、もう濟ませた。君の仕事はどうした、今までやつて居たのか。』

『やり上げるだけは、兎に角すつかりやり上げて來た。だが、到底訂正したり、讀み返したりする暇は無いから、ほんとの書きつ放しさ。後で君一と通り眼を透して吳れないかなァ、隨分酷い誤譯もあるだらうと思ふが。』

『ウン、よし。――尾行がついて來たのか。』

『いゝや、僕も尾いて來るかと思つたが、一向そういふ樣子も無い、どうも些し變だネ。何だか氣味が惡いよ。ハ……。』

『僕が全然無關係だ、何も知らないといふ譯には往くまいと思ふがネ……。』

『何故。だつて無關係、何も知らないに違ひないもの。いくら何だつて、事實は奈何ともし難いじやないか。』

『然し君、向ふが些しの間でも、僕等の活動を

抑へやうと思へば、是れは絶好の機會だからチ。それに僕の無關係といふ事は、向ふの容易に信じない處だよ。少くとも、その事實が打ち建つ迄は、僕も入獄るものと覺悟してるよ。ハ、、、。』

高岡は思ひ設けなかつた深淵が、急に脚下に口を開いたやうに感じた。自分自身の入獄は、當然の事でもあり、何の障碍困難をも惹起さないが、山田の入獄は、今やつて居る雜誌は勿論、新らしい雜誌の創刊に、直ちに非常な齟齬を生ずる。それはいゝとしても、高岡には、山田の健康が何よりも氣遣はれた。出てまだ半歳と經たない中に、またすぐ入獄した。山田は同志の中で、最も多く入獄るといふやうな惡戰を、山田は三四年間續けて來た。そして最後に出て來た時は、既に肺と腸とを甚く壞して居た。それを今、全く責任の無い事の爲めに、假へ短かい間にしろまた獄に下すのは、彼には何よりも忍びない處だつた。その結果は、彼の平生深く恐れて居る事の一つだつた。然し、固よりそれを豫期してやつた事でも無し、また濟まないと云つて、謝まるべき性質のものでも無い。同志の言論文章の爲めに罪を得、或は直接の責任が無くて、同志の運動の連累となつて獄に下つた者も多いが、それが主義に關して居る限り、一人として苦情を云つたり、不平を唱へたりする者は無かつた。彼等は皆、欣然としてその運命を享受した。何も初めにそういふ契約をしたのでも無く、そういふ規則が設けられてあるのでも無いのだが、『主義の爲め』といふ語は、暗默の間に自ら確定された、彼等の不文律であり、神聖な道德律であつたのである。

『だから、若し聞かれたら、事實ありの儘に云つた方がいゝと思ふよ。こういふものが出來たことを、君から聞いて、初めて知つたといふ事實をサ。』

『そうだナ、それは聞かれたら云はう、別に差支へもないから。然し、面倒くさい事を云つたら一切返事をしないつもりだ。そうしたら如何するか、やる處までやらして見やう。――何時だい、もう。三時半か、待つて居るだらう、じや、一寸行つて來る、一寸じや濟まない事になるかも知れんがチ、ハ、、、。』

『行つて來給へ、僕ァ兎に角、こゝに待つてるか

ら子。もし歸つて來て居なかつたら、あの給仕に聞いて呉れ給へ、云ひ殘して往く。じや、失敬。』

廣い往還は、白銀のやうに眩しく光り、濠畔の柳は、暑さに疲れきつたやうに枝を垂れ、砂挨りに塗れた葉は、白ちやけて捲き返つて居た。鎧戸を揚げた電車は、苦し氣に吐息する如く、車体を刻むやうにして、長い線路の上を動いて往く。右側には白い巍峩とした、劇場の建物に隣つて、宏莊な赤煉瓦の洋館が睨め廻すやうに聳へて居る。厚いガラス戸は重々しげに閉されて、高いアーチ形の入口を入ると、冷々とした空氣は、厚い壁や太い柱の隅々に、うす暗く疊まれて澱んで居た。高岡は一隅の受付の處へ名刺を出して、

『井上〇〇〇に會ひたいのですか。』

と云つた。白い詰襟服を着た受付は、名刺を二三度ひつくり返して見て居たが、

『井上さんはもうお退けになりましたよ、二時半頃まで待つてお出でゝしたがナ、お出でがないので今し方お歸りになりました。官舍はつい此の裏ですナ、其處をお拔けになれば、ぢきですよ。』

そう云つて、入口の處まで出て來て、道筋を指して敎へた。

高岡は一本の樹の、ヂリヂリ照りつける日光を蔽ふものとても無い構内を通り拔けて、廣い殺風景な裏通りに出た。表通りに向いて居る洋館が、切つ立ての背を向き合せて、その中間の四角な空地には、塵挨だの、煉瓦だのが堆かく積んであつた。撒水した跡の道は生乾きに乾いて、砂挨りの咽つぽい臭ひが、大氣の中に低く浮いて居る。そこは自働車の倉庫だの、幾頭かの乘馬を繫いだ厩舍だのばかり、並んで居る處だつた。高い板塀の圍ひの中に、官舍らしい瓦葺の新らしい家も、幾軒か建つて居た。そこらを歩き廻つて居ると、汗がダクダク流れて、氣味惡く胸や脊を傳はつた。然し、いくら探してもそういふ表札のかゝつた門は無かつた。高岡はまた受付の處へ戻つて來て、もう一遍詳しく聞かうと思つたが、フト思ひ返して、明日やつて來るといふ傳言を賴んで出た。

階段からヒョイと顏を出すと、山田は吃驚したやうに、

『ヤア、如何した。ばかに早いじやないか。』

『ナーニ、往つたらもう半時間も前に歸つたつ

て云ふのサ。それから官舍を聞いて探し廻つたけれ共、却々わからんしチ、それに暑くて堪らんからマア一先づ引上げた。』

『さうか、そりや少し變だナ、然しまた明日でも迎へに來るだらう、ハヽヽ。君、何か飲むか、やらない。じや、兎に角出やう。』

兩人はカフヱを出ると、公園の前から電車に乘つて、赤坂の溜池に近い佐野の處へ寄つた。佐野は大きな體に筒袖の浴衣を着て　椽側で團扇なぞ使つて居た。軒先には風鈴が絶へず輕い音を立てゝ、狹い庭には、朝顔の蔓が低く這つたり、秋海棠と葦を植へた鉢や、しほらしい西洋草花の鉢なども並んで居た。三人は歐洲の戰爭や、暗殺された佛蘭西の社會黨首領の事なぞを話し合つた。やゝ詳しく佛蘭西の情勢に通じて居る山田は、ジョーレスを暗殺したのは、主戰論者では無くして、寧ろ社會黨の態度に慊たらぬ非戰論者ではないかといふ事や、エルベが復活して、再び非戰論の爲に氣焔を吐くだらうといふ事なぞを話した。

『そうだらうナ、ジョーレスの事は僕も多少疑ひを挿んで居た。此の間も××新聞の記者が來て、何か知つてる事は無いかと云つたが、マア如何かよくは解らんが、そうでは無からうかつて、話していたがネ。』

佐野はそう云つて、すぐまた言葉をついだ。

『一体、ジョーレスといふ人は、自分の意見は兎も角も、それが黨の政見、多數の輿論となれば、それに服從するといふ風らしいナ。』

『どつちにしたつて、社會黨の首領が反對黨を怒らせて、殺されるやうな眞似はしやしないよ。』

山田は皮肉らしくそう云つて、獨りで面白そうに笑つて居た。

高岡は豫期して居た重大な事柄が、案外何でも無かつたので、何だかボンヤリした、ガッカリしたやうな心地になつて居た。いろんな事を一時に考へたのと、烈しい暑さに照り付けられたからかとも思つたが、何しろ、やつて來ればもう歸つて居ないやうな事に、あんなに御大層な取越苦勞をしたかと思ふと、不愉快な後めたい感がしてならなかつた。で、彼は話の中にもたいして口を出さず、疲れ切つた顔をして柱に倚り掛つて居た。

『どうだ、もう歸らないか。』

彼はつまらなくなつたので、そう云つて山田を促がした。

『ウン、歸らう、家でも心配してるだらう。ア、君、一寸。』

山田は佐野に一寸目配せして、兩人して二階へ上つて往つた。あとで、高岡は佐野の妻君と、村井といふ彼等の同志の一人の噂などして居た。

『ですが、村井さんも隨分色男ですわネ。何しろ若い女が二人迄も、一緒になれなけりや死ぬの、生きるのつて騷いでるんですからねえ。あのお淸なんぞねえ、村井さんとあゝなつたと思ふと、家まで戀しいつて云つてね、始終前の家の近所なんぞへ往つて見るんですつて。ホヽヽヽ。』

『いや、そうしたもんですよ。』

『高岡さんなんか、隨分覺へがあるんでせう。』

『然しネ、この間も村井がつくづく云ふんです、二年ばかりの間に色々な經驗をしたつて。だから僕も云つてやつたんですよ、君は約三十年間、淸敎徒的な禁慾生活を送つて來たのが、出獄後、此の二年間ばかりに長足の進歩をしたんだ。そして僕等が十五六からやつて來た經驗を、君は僅か二年間に縮驗して了つた。進化論に從ふと、人間は生物が數十萬年間に進化して來た徑路を、僅か十ヶ月間の胎兒生活で經過するそうだから、君なんざ僕等に較べると、余つ程高等な生物なんだつてネ。ハヽヽヽ。』

『まア、高等な生物、ホヽヽヽ。』

そんな馬鹿話をして笑つては居るが、高岡は何處か心の隅に、ブス〱燻つて居る寂しい感じをどうしても追ひ出して了ふことが出來なかつた。大きな激情の後に來る反動と、暑い日中を疲れた体で駈け廻つたのとで、彼は非常に憂鬱（メランコリック）になつてゐた。で、何の氣無しに話し出した村井の事が、ひどく寂しい回想を誘つたのである。自分達はいつも村井を馬鹿にする、彼の女に對するダラシ無さと、暇と金さへあれば、銘酒屋へ往つて了ふ彼を、賤しんだり嘲けつたりする。然し、誰も彼の苦しみと惱みとに同情する者は無い。彼も曾ては勇敢に戰つた一人である、その爲に手傷を負ふた一人である。彼は今でもやつぱり、戰はうとする熱望と、手傷を恐れない勇氣とを有つて居る。け

れ共、戰へないのである、戰ふ事を許されないのである。手も足も縛せられ、口も舌も緘せられて居るのである。そして生活といふ責め道具で、拷問にかけられて居るのである。その上、戰ひの間は忘れられて居た、三十を越した男の烈しい本能の欲求と、永い間の禁慾生活に對する反動とが、無爲徒爾の今となつて、拒み難い力で彼の上に押し寄せて來たのだ。感激性に富んだ彼が、しばしば同志に對つて『君、今度遊びに往つたら、僕の頭を撲つて呉れ給へ。』涙を流すやうにして、そう云つて居ながら、またすぐ出かけなければならなかつた程、その衝動は强かつた。それは彼ばかりでは無い、多くの同志の上にも壓倒した。自分もまた、その反動の流れから脱れる事が出來なかつた。それを羞ぢながら、苦しみながら、悩みながら、一歩、一歩、その流れに引きづられて往つた。おとり！ 愍れな、無智な、便る者も無いおとり！ それは今、自分のまつ直な歩みの上に、大きな躓きを置いて居る。自分が一歩前に進むと、二歩後へ引き戻す恐ろしい力になつて居る。それは、打ち克ち難い運命の、獅子が小兎を弄ぶやうな酷たらしさ、人間の少さな意志を推しのけて進む自然の力强さの權化である。自ら征服しやうとして居る自己の性情と、自ら創り出さうとして居る境遇との、皮肉な、そして身の毛のよだつ叛逆である。それを村井は、何の顧慮するところも無く、殆んど盲目的にやつて居る。彼は實に臆病である。だから見苦しいほど恐れたり、逡巡したりして、自己の行爲に對する責任を避けやうとする。然し一度その盲目な本能に驅られると、人の思惑や、後の難儀も顧みぬ、狂奔するやうな彼の姿を想ふと、高岡は彼に對する日頃の不快な感は無くなつて、只だ愍れにいたたましかつた。――然し、そう思ふ一方に、高岡はその臆病と卑怯とを在るが儘の事實として、是認しきる心もちにはなれなかつた。彼は常に何等かの手段に依て、少くとも自分一個だけでも、此の反動の流れから上げやうと思つて居た。『最後まで押し詰めなければいけない、究極まで！』彼はいつも、そう心の中に叫んで居た。

高岡は終ひには、殆んど何を考へて居るのかわらなくなつた。疲れ切つた頭の中には、雜多な、

思想感想が渦を巻いて居た。兩膝を立て丶柱に頭を凭せて居ると、ボーッとしたやうになつて了つて、佐野と山田とが、二階から降りて來る迄は、弄ぐつて居た團扇を取り落したのすら、氣がつたない位だつた。

『今日の事を佐野に話したんだ。君も僕も萬一やられた塲合の後始末もあるからネ。佐野も、どうもそれは怪しいといふんだよ。こう迄なつて居て事實がまだ判つて居ないといふ筈は無いし、判つて居ながらこういふ態度をとるのは、何か思惑があるに違ひ無いつていふんだ。つまり、是を枷にして、何か交換條件でも持ち出すんじや無からうかつていふのサ、新しい雜誌を出そうなんて云つてる際だからネ。どうも兩人とも入獄るといふやうな事になつても困るし、と云つて交換條件なんぞ持ち出されるのも困るつて云つてたよ。』

外へ出てから、山田はこう高岡に云つた。

『そう、僕も或はそんな事じや無いかしらと想ふんだが、然しまあ向ふの出やう一つだ。是れを枷に交換條件なんか持ち出しやあ、却つて恥をかくばかりサ。何もこつちは、今さらビクビクすることあないんだからなア。』

西の空はやうやく紅く彩られて、高く漂よつて居る處は、火焔の斷片が飛んで居るかと思はれた。暗緑の色を深く湛へた杜と、曠く開けた野原との間を、郊外を通ずる電車は快く駛つて往つた。高岡は水のやうに車內に流れ込む涼しい夕風に吹かれて、やゝ頭の輕くなつたのを覺えた。些の感情の行き違ひから、彼は久しく佐野の許を訪づれなかつた。が、今日久しぶりに會つて見ると佐野はやはり親しい、なつかしい先輩であつた。顧みると、初めて佐野に會つてから、もう十一二年にもなる。當時、彼はまだ十六七の少年で、故郷でソシアリストの小團体を作つて、熱心に傳道して居た頃であつた。佐野の亡くなつた妻君が彼の町の高臺に在る病院に來て居た。彼は同志の一人と見舞なぞに往つたが、病夫人は見るに堪へない程、痛々しく瘠せ衰へて、ものを云ふさへも苦しげであつた。彼はまた、そこで初めて佐野に會つた。その書いたものなどから、蕭洒たる男振を想像に描いて居たのが、會つて見ると、肥つた武骨そうな人であつたのに、彼は微かな驚きと失

望とを感じた。佐野は西洋の新聞に赤鉛筆で線を曳きながら、ビスケットなぞを出して、ソロ／＼話をしかけた。それは初夏の日盛りだつた。眼下に迫る入江は、眩めくやうな銀色に輝やいて、廊下に氷を砕く音なぞも聞えた。

『君は英語、で無くとも、何か外國語をやりますか。』

彼は今でも、その時佐野が强度の近眼鏡の底から、柔しい笑をたゝへた眼でヂッと見つめながらこう尋ねたのを記憶して居る。彼はその後、初對面の後進なぞにこう云つて聞くのが、佐野の殆んど癖になつて居る事を感じた。

『何でもいゝが、兎に角外國語は一生懸命やらなくちやいかんナ。』

その時、佐野はまたそうも云つた。それから幾年かの後、彼が佐野の家に寄食して居た頃なぞも佐野はよく本箱から洋書を引つばり出しては、『どの位ゐ上達したか、一つ試驗してやらう。』と云つて、よく彼に譯讀を附けさせたりなどした。更にその後、或る事件で佐野も高岡も一緒に入獄し、裁判が定まつてＣ――監獄に送らるゝ時、佐野は汽車の中で、『君も今度獄を出たら、もう何でも讀めるといふやうにならなけりやいけないぜ。』と、訓すやうにして彼に云つた。――考へて見ると、精神的にも物質上からも、佐野には負ふ處が實に多い――　高岡はよくそう心で思つた。それが思想の懸隔と、性情の差違とは、ともすれば高岡を佐野から離れさせた。殊に先頃、ある事で感情の行き違ひを生じてからは、彼はしばらく佐野の家に出入しなかつた。その癖、佐野から『僕は君と喧嘩するに忍びない、君と別れるに忍びない。……僕は君の怒りが解けるのを待つより外は無い。』と云ひ越された時は、どんなに堪へ難い慚悔の念に責められたか知れなかつた。しばらく經つと、心は解けたもの丶、何だか行き遲れたので、改めて出かけて往くのも氣がさして出來なかつた。それが、いま會つて見ると、やつぱりなつかしい人である。如何に思想が異なるにもせよ、如何に行く路が隔たれるにもせよ、佐野は自分が、離れる事の出來ぬ人である――、彼はしみじみそう思つた。

翌朝、再びＳ――署の巡査は、高岡のまだ寢て

居る中にやつて來て、昨日と同じ旨を云ひ置いて往つた。

朝飯をすませるとすぐ、昨日やり上げた仕事を訂正し始めた。おとりは昨日高岡が無事に歸つて來たので、今日は巡査が來ても、さうたいして心配はしないやうだつた。そして『あの巡査、けふは昨日ほど慄へ聲じやありませんでしたね。』なぞと、笑つたりして居た。高岡は然し、もう昨日のやうに發覺とか、入獄とかいふ事を心配はしなかつたが、只だ佐野の云つた『交換條件』が、氣がかりで仕方が無かつた。――妥協は固より斷じて厭だ。然し、若し自分ばかりで無く、山田までも囚へられて、その爲め、新らしい勞働雜誌の創刊に、挫折を生じたらどうしやう。萬一の時、山田にまでも累が及んで、彼の傷ついた健康と、吾々の運動の將來とに、取返しのつかぬ損害を招くことを恐れて、今度の事は山田にさへも知らせずにやつて了つた。それだのに、どんなに少く積つて見ても、山田が此の事件の渦中に卷き込まれるといふことは、殆んど疑ふ餘地が無い。さうするとと自分のやつた事は、結局吾々の運動に、損害を與へるに止まるのだらうか。成算も既につき、準備もほゞ整つた、新らしい事業の生命を、自ら一時斷つことになるのではあるまいか。反動がまた起る、迫害がまた來る、同志の間の猜忌と狐疑、この間に巧みに行はれる離間中傷。凡てさういふ恐ろしい敗壞力が、旋風の砂を捲くやうに襲つて來て、運動を組成する細胞と細胞との結合力を殺して了ふ。――その恐ろしい結果に對する一切の責任を負ふか、卑しむべき妥協の前に膝を屈するか、高岡は自身がその二つに岐れた迷路に、ピッタリ面を押し付けたやうな心苦しさを感じた。

一時頃には、大体の訂正を終つた。で、外出の仕度をして隣りに寄つて、山田に仕事の校閲を頼んだ。

『誤譯を探すのは譯は無いが、直すのは大變だなア。まあいゝや、仲間内の仕事に誤譯があつちや他人の誤譯が指摘されないからなア。――もう、出かけるのか、待ち給へ、僕も一緒に行かう。』

『御苦勞さまだなア、毎日毎日。何しろこう暑くちや本人も大儀だが、附添人も一と通りじや無いネ。』

両人はこう云つて、笑ひ、笑ひ、家を出て行つた。H――公園の前で電車を降りて、また昨日のやうにカフエM――の二階に上つた。

『もう彼れ是れ二時だナ。どうだ君、もう三十分ばかりてしから往くからつて、電話をかけて置かないか。それから、××館へも電話をかけて、あの印刷に就て○○○からでも調べに來やしなかつたか、聞いて見給へナ。もしまだ來ないと云つたら、それは君が發送した事しか、まだ解つて居ないんだよ。』

『そうだなア、一つかけて見やう。』

高岡は山田に云はれて、下へ電話をかけに降りて往つたが、しばらくすると、額の汗を拭き拭き戻つて來た。

『ダメ、ダメ。今月に入るとすぐ、○○○から來たとサ。そして是れを刷つたか、何部刷つた、紙型は取つてあるかなんて聞いてつたそうだ。』

『そうか、すると君、いよ〳〵交換條件を持ち出すチ。初めは屹度、ウンと脅しつけるだらう。それから、何とか切り出すに違ひないよ。』

『然し、そう事が定れば却つて安心だ。どうもあゝ宙ブラリンで居ては、うすつ氣味が惡くてしやうが無い。だが、こつちがその妥協に應じなければ詰りその儘ほうり込まれる事になる勘定だ。すると、このレモン水も今日が當分の飲み納めか。おい、レモンを呉れ。』

高岡は給仕の女を顧みて云つた。また當分、貧しいそして急がしい生活に許されてあつた、ホンの僅かばかりの自由と放恣とにも別れなければならぬ。そして嚴重な獄則の間に、羞恥と、卑下と、屈辱と、服從との生活を送らなければならぬ。そのいたましい最後の數分を、誰も知る事無く、誰にも氣付かるゝ事無く、只だ一人の同志と、此處にこうやつて過すのである。彼は非常に寂しかつた。然しまた、バカにはしやぎたい氣分でもあつた。お松といふ眼の活々として大きな、給仕の一人が上つて來て、笑ひながら卓の傍へ來た。

『昨日は、あなた、隨分お急がしそうでしたわネ。日中の暑いさなかを、往つたり來たりなすつて。』

『今日だつてそうだよ。是れから、また飛び出すんだ。』

『何をそんなに、急がしがつて居らつしやるの。』

『此の人はネ、今まで一緒になるいつて釣つて置いた女がね、一緒になつて呉れなきや死ぬつて騒ぐもんだから、慌て拔いてるんだよ。』

山田が眞面目な顏をして、口を出した。

『だつて、一緒になるなんて云つとくからにや、惡かないからでしやう。なら、一緒になつてあげればいゝじやありませんか。』

『處が、此の男は、家にや女房があるのサ。』

『まあ隨分だ。男つて皆なそんななんですのネ。それじや困つたつて自業自得だわ、いい氣味だわ。そうして困らなくちや、却々浮氣が止みやしない。』

『ハヽヽヽ、大に憤慨するネ。まだまだ、どうして、こんな苦しみ位で浮氣が癒るものか、なあ。』

兩人はそんな他愛も無いことを云つて、互に聲高く笑ひなどした。女達は『隨分ねえ。だけどあんなこと、乾度いゝ加減よ。』と云つたやうに、默つて眼ませし合つて笑つて居た。

『さあ、もう往かう。一二三十分したら往くつたら、なるべく早く來て呉れなんて云つてたから。じや失敬。』

『マ、往つて來給へ。僕は兎も角、こゝに待つて居て見やう。』

熱い風が、輕い砂を捲いて轉ばつて來る。一足外へ出ると、高岡はもう頸筋や、耳裏などが、砂でザラ〳〵するのを感じた。足袋の紺色も、埃りでまつ白になつて了ひ、額の汗を拭ふと、うすい墨を拭つたやうな汗水が手巾に付いた。高岡は受付に來意を告げると、昨日の白い詰襟の服を着た男が、階段を登つて三階へ導びいた。コンクリートの長い廊下を通つて往くと、入口に衝立を立てた室の前を、幾度か過ぎたが、人は居ないのかと疑ふ程、室内の寂寞して居るのを見ると、何と無く無氣味な感が身に迫るやうだつた。〇〇〇〇室と書いた室の前へ來ると、

『こゝでございます。一寸お待ち下さい。』

と云つて、小使は內部へ入つて往つた。が、またすぐ出て來て、

『はてナ、今まで居られたのだが。』

そう呟やきながら、隣りの室に入つて探しなどしたが、其處にも居る樣子が無かつた。

『まさか、歸つたのじやありますまいネ。』

『えゝ。まだおりにやなりませんとも。一寸こゝにお待ち下さい。向ふへ往つて、探して參りますから。』

高岡は、小使の去つた後に獨り殘されて、見下すやうな建物の側面や、遠く頭だけが見える杜の翠りを、窓越しに眺めて居た。と、高い靴音が聞えて、やはり白い詰襟の服を着た、髮の毛のやゝ薄い男が近づいて來た。そして、ニコニコしながら、

『や、お待ち申して居りました。さ、どうかこちらへ。』

と、ズンズン先へ立つて室内へ入つて往く。高岡は此の男も小使なんだらうと思つて、その後に續くと、男は椅子を奬めながら、

『どうかお掛け下さい。私が井上でございます。』

と、云つて頭を下げた。高岡は初めて、これが○○○○だつたのに氣がついた。で、一寸まご付いたが、卓の前へ立つて、丁寧に挨拶してから腰を降した。

室の突當りには大きな窓があつて、その下には大きな四角い事務卓が据ゑてある。右手にはガラス戸をはめた高い書棚があつて、本がギッシリ詰まつて居る。見ると、曾て發賣禁止に遭つた、主義に關する書籍などもあつた。高岡は突嗟の間に、數年以前、鑛毒問題で喧ましかつたY——村が亡ぼされて、利根の濁流を注ぐべき瀦水池となつた時、年少の血氣に任せた痛憤の文字を並べ、出すとすぐ發賣を禁止された『Y——村滅亡史』も、やはりあの書棚の中に在るのじや無からうかと思つた。てふどこの時、背後に誰か入つて來る足音がした。と、井上は起ち上つて、

『橋本さん、○○○○です。』

と、高岡に紹介した。彼は起ち上つて、挨拶を返しながら見ると、やはり詰襟の白服を着て、四角なうすあばたのある、元氣のいゝ顏をして居る男で、短かく摘んだ髮は、黑い毛と云つては殆んど無かつた。橋本といふ○○○○は、默つて事務卓の前に座を占めると、すぐ何か無駄書を始めた。

『お急がしい處を、わざわざお呼び立てしたのは外でも無いんですが、此の頃、大分關西の方で、出版の屆けをしてない××××××といふ小冊

子が現はれるんです。で、大分手を盡して探しました結果、到頭、N――市の水野君の處から、二三百部押收したやうな譯なんです。それで初めてあなたの名なり、印刷所なりが解つたものですから、印刷所の方も調べ、今日御足勞を願つたやうな次第なんですがナ。』

高岡はかなり靜かな心もちで、井上のこう云ふのを聞いて居た。一つは井上といふ人間の印象なり、その態度の感じなりが、大變良　つたのにもよるが、今度は何と云ふだらう、此の次は何を云ひ出すだらうといふ好奇心めいた感情が、少なからず彼の心の不安を穩やかにした。井上は卷煙草入から、敷島を一本とり出して火を點けた。

『ありやア、どの位ゐお刷りでした。』

『てふど千部です。』

『で、お送りになつた先は、井上君の處の外は、何處ですか。』

『外にはありません。』

『○――市へは、誰かの處へお送りになりませんか。』

『いや、送りません。』

『すると、まだ七八百ある譯ですナ。それはまだありますか。』

『あらかた配つて了ひました。』

『それは、主にどういふ方面ですか。』

『勞働者の間です、砲兵工廠だの、電車だのの。』

『處がですナ、こつちも大分そういふ方面を探したのですが、一向出ないのです。然るに、○――市の方では、チョイチョイ出るのですがナ。』

『それはこつちでは、後難を恐れて出さないのでせう。それに三百ばかりは、知れた事が解つてから燒いて了ひましたよ。』

『然し、東京市中だけへ、五百もお配りになれば少しは出なくちやならんと思ふんですがナ。もう些とも殘つて居ませんか。』

『さあ、五十や六十は、まだ殘つて居るでせう。他處に預けてあるのですから、詳しい事は解りません。』

『その預けてあるのは何處ですか』

『それは申せません。が、あるだけは僕から屆けませう。』

そう云つてから、高岡はこれは讓歩の第一歩だ

と思つた。彼れ自身にも、どうしてこんな事を云つたのか、よく解らなかつた。多分、一部も殘つてないと云ひ切るのが、餘りに誠しからぬやうに思はれたからであらう。井上はしかし、預け先を深くは追究しなかつた。

『では、是非そうして下さい。禁止されたものなのですから、それを知らずに配れば、刑罰に觸れなければなりませんからナ。處で、あの小冊子ですが、無屆けで出版されゝば、當然刑法の定むる處に依て、處罰を受けんければならんのです。ですが、此の内容が、非常に兇惡だといふ程でも無し、殊に是を公けにすれば、事件が小さいのに問題が頗ぶる大きくなると思ふのです。こういふ事で自由を束縛するのは、諸君にもお氣の毒であるし、またこちらも決して好む處では無いのです。で、實は今、それに就て考へて居るのですがナ。』

高岡は心の中で、いよ〳〵來たナ、と密かに思つた。そして、井上が口を切つて、新らしい卷煙草に火を點けた時、急いで言葉を挿んだ。

『これが法律に觸れる事もよく知つて居ますし、また固より、僕は責任を避けやうとも思ひません。』

今まで默然として、兩人の問答に耳を傾けて居た橋本は、この時初めて口を開いた。が、先刻からやつて居る徒ら書さは、やはり續けて居た。

『ねえ井上君、是れあもう、相談する餘地も何も無いよ。高岡君は是が法律に觸れる事も承知、その爲めに刑罰を被る事も覺悟だといふのだから、今更とやこう云ふ必要も無し、また云つたつて無駄だ。』

『然し、ですナ。こういふ一小事の爲に、短かくとも自由を拘束されるのは、非常な不利益だら今と思ふんです。それも單に君ばかりでは無い、多數の同志にまでやはり累が及ぶのですから。こういふ小問題の爲めに、此の頃は別に過激な言動も見えない君等に對して、再び以前のやうな拘束を加へるのは、君等の方も厭でせうし、こつちも隨分大變なのです。』

『ですが、まつすぐに出る路が無いとすれば、厭でも應でも、横道へ外れるより外はありません。』

『ホウ、横道へ外れるより外は無い。じや、君は今後も猶、こういふ○○○○なぞをやるといふの

だネ。』

橋本が冷かすやうな口調で、また横合から口を出した。高岡はもう我慢がし切れなくなつた。一人が脅すと、一人が和めるといふやうな、古いやり口を見せ付けられると、如何にも甘く見られて居るやうに感じて、顔の熱くなつて來るのを感じた。

『それは別問題だ。僕は將來の態度を言明する義務は無い。人間、云ひたい事も云へず、書きたい事も書けなければ、何處かにその思想感情の出口を見出さずには居られません。』

『然し、君等のいまやつて居る雜誌は、別に禁められもせずに出て居るじやないか。』

『それア、毒にも藥にもならないからです。けれ共、僕等が〇〇〇講演會を開かうとすれば妨害する、××××××研究會を開けば干渉する、あんな何でも無い雜誌さへも、購讀者を脅し廻つたり、本屋に買ひ手の名を聞かせたりするじやありませんか。君はあの雜誌が無事に出て居るといふ。然し、そんな單純な事で、人の行動が律せられるものじや無い。永い間の迫害と壓制とが原因となつて、それが或る動機に會して現はれたのです。僕等は十月から新たに雜誌を出す。また定つて無法な迫害が來ます。少くとも從來の經驗は、僕等にそう敎へます。然し、無法な壓制や迫害はこういふ結果を生むゾ、まつすぐな路を通らせないと、横道へ外れるゾといふ事を示さうと思つたのです。』

『フム、然し、それは自ら君等の言動に、一層嚴重な拘束制肘を、招く所以じやないか。』

『そうかも知れません。それと同時に、經驗は僕等に、政府が、そうだから成るべく自由を與へてやれといふ態度に出る事をも敎へます。』

『マ、マ、兎に角ですナ。』

今まで默つて煙草を喫つて居た井上が、漸く熱して來た兩人の議論の間に、仲裁にでも入るやうに、言葉せはしく口を入れた。

『今までどういふ事があつたかは、吾々が局に當つて居なかつたので知りませんが、私は餘り干渉めいた事はしたくないのです。で、今度の事なども、濟んだ事は仕方がありませんし、只だ殘つて居るだけを差出していたゞけば、マア不問に附そ

うかと思つてるんですがナ。然し、君等の方も法律の許す範圍内に於て、言論行動していたゞきたいと思ふのです。で無いと、一旦こういふ事があつた以上、遺憾ながら、また舊のやうに、嚴重な警戒を附さなければならないのです。』

『然し君、誤解しちやいかんよ。是れは妥協を申し込むのでも何でも無いのだから。君等にその主義を捨てろとか、何とかいふのじやない。只だ國法の許す範圍内で、言論なり行動なりをしたら如何かといふのだ。それが詰り、君等が主張を貫ぬく上に、最も安全有力な方法だと思ふんだ。〇〇〇〇でも何でもやる。國法なんかは蹂躪して憚からぬといふ態度だと、こちらでも止むを得ん、自由を拘束せにやならん事にもなる。』

『僕等の言論、たとへば今度出す雜誌に對して、從來のやうな無茶な壓迫を加へられなければ、僕だつて何も好んで、法律に觸れるやうな事はしません。』

讓歩の第二歩だ！高岡は再び心の中に叫んだ。然しまた、全然の屈服じや無い、そして何よりももつと甚だしい讓歩や妥協を、交換條件として提出されなかつたことを、彼は心から喜ばざるを得なかつた。

『いや、どうも暑いのに、態々御足勞を願つて相すみません。ではどうか、殘部を一つ差出して下さい。や、失敬します。』

井上は、室の入口まで高岡を送り出しながら、愛想よくこう云つた。

外へ出ると、突然カッと眩しい日光が、まるで潑ぎかけるやうに、正面から照りつけた。高岡はホッと息を吐いて、眼にしみ入つた汗を拭ひ々々歩んだ。M――の前まで來ると、山田が二階の窓から顔を出して居た。

『大分おそいから、是れア愈々やられたかと思つて、一寸心配したよ。どうだつたい、會見の模様は。』

『あゝ暑い、おい、その煽風器をこつちへ廻して呉れ。いや、別に大した事も無くて濟んだ。是れア妥協じや無いつて、向ふが却つて辯解して居たよ。』

高岡はそれから、かいつまんで、會見の模様を

語つた。一つは內容が、そう過激なものじや無いからかも知れぬが、事を荒立てて社會の注意を惹いたり、同志を刺戟したりしない方針らしい、といふことなぞも話した。

『ハ、ア、賭博本能の勝利だね。然し、まあ、何にしても宜かつた。どうだ、何か食はないか。そうか、じや出かけやう。あゝ大分涼んだが、外はまだ暑いだらうナ。』

神保町で電車を降りて、山田は小川町のS——社といふ佛文書の本屋へ寄つた。そして新着の書籍を二三冊受とつて、しばらく主人と戰爭で荷の來ない事や、郵便も屆かないらしいといふ事などを話して居た。佛語の少しも解らぬ高岡には、書棚に一杯飾つてある書籍も、何の興味も惹かなかつた。ただ、人のよささうな顏をした主人が、ベルグソンの『メタフイジク』とかいふ、新刊書の內容を話しなぞしたのには、少なからず驚かされた。

『あすこの主人は、却々偉いんだネ。』

『あゝ、却々どうして。あすこは以前、カトリツクの坊主が、自分達の便宜の爲に開かせたのだがネ。その頃はゾラや、モウパツサンのものなぞは注文しても取つちや吳れなかつたもんだ。』

『然し、本屋の主人が、ベルグソンを論じたりするのは、非常に面白いじやないか。』

兩人(ふたり)はそんな事を談しあひながら、やうやう日蔭の多くなつた三崎町の、汚ない街をあるいて往つた。そこには、古い屋敷長家を作り直して、通り店にしたやうな、小さな、うす暗い家が多かつた。腰かける處もないやうな狹い、ビシヨビシヨの土間に、緣臺なぞを置いて、氷の旗を吊してある店もあつた。袖の無い襦袢と白い腰巻一つの女が、往來がチヤブチヤブになる迄、水を撒き散して居たりした。高岡の胸には、いろ〳〵の思ひや感じが、織りたゝむやうに流れた。彼は今日の出來事を考へると、不愉快な、屈辱的な感がして堪らないので、なるべくそれを避けるやうにして居た。その考へが頭をもたげると『戰ひは永いのだ戰ひは永いのだ』と、そういふ厭な想ひを鎭める咒ひのやうに、心の中でくり返した。が、彼は自分の身と、一緒に歩いて居る山田との對照だけは、どうしても深く考へない譯には往かなかつ

た。――山田は默つて往く。然し。確乎として進む。今の雜誌を創めたのも彼だ。××××××研究會を起したのも彼だ。更に新しい勞働雜誌を作らうとして居るのもまた實に彼である。彼はまつすぐに往く。何があつても顧慮しないで進む。他の人間が一里の路を、十歩にも二十歩にも、小刻みに歩む間に、彼は大股に一足で越えて了ふ。他の者が如何にも活動して居るらしく、彼が如何にも靜止して居るらしく見える時、彼の一足は他人の十歩二十歩を超えて居るのだ。ツイ此頃彼に○○○○を奬めた、或る同志の男があつた。彼は体よく斷はつた。『君は僕を信用して呉れないのですか。責任は僕一人が引き受けます。』男はそう云つて憤慨した。けれ共、彼は『そういふ事は人に相談するものじや無い。もしやるなら自分一人でやるがいゝ。』と云つて、到頭應じなかつた。その彼は、然も肺と腸との疾患に、始終苦しんで居る彼は、全然責任の無い此の事の爲に入獄を覺悟して、然も一言も自分を責めなかつた。――高岡はそう思ふと、思はず胸が一ぱいになつた。彼は堅く唇を噛んだが、熱い涙は止め度無く瞼にあふれた。

甲武線電車の水道橋停留場に上ると、低く眼下に展けて居る市街は、やつと夏の太陽の苦熱から脱れて、吹きそめた夕風に息をついてゐるやうに見えた。何處からか、カナカナカナカナと、薄い金屬を摺り合せるやうに、蜩の鳴く聲が聞えて來る。まだまつたく暮れ切らず、黄昏の微光のたゆたふて居る碧空には、立ちそめた秋の氣が、水のやうにさびしく流れて居た。

『それでも、もう朝晩は初秋だナ。』

『あゝ、吹く風が冷々するからネ。……もうぢきだネ、二た月と間は無いネ。』

兩人(ふたり)はそう云つた。眞面目な、眞實の戰ひ！その戰ひを開く時が、犇々と身に迫るやうだつた。

高岡はまた、山田と彼れ自身との關係を、過去に遡つて考へて見た。山田と知り合ふやうになつてから、十年の月日は水の流れるやうに過ぎ去つた。けれ共、兩人の交情は初めから非常に親しかつたとは云はれない。兩人は親密に交際したり、語り合つたりする機會は乏しかつたばかりでなく

山田が東京で活動して居る頃、彼は南海の僻陬に在つて、傳道に從つて居た。その兩人が、初めて一緒に運動したのは、彼の大事件の先觸れといふべき、○○事件であつた。そして、數名の同志と一緒にC――監獄に入れられて居た間に、高岡は眞實に山田に對する熱い友情を感じた。雜役夫の四人から密かに貰つた鉛筆の心で、淺草紙へ感想を記しては、兩人はよく運動や入浴の際に、それを渡したり取つたりした。獄を出てからも、兩人は强ひられた無爲の苦痛に堪へられないで、いまの雜誌を創めた。どうせ不滿足なものには決つて居る、然し、そんな物でもやつて居れば、一度離散した同志が、またそれを中心として、集まつて來るかも知れない。――兩人の初めの考へはそうであつた。

それは秋の夜であつた。兩人はH――公園の横手を、雜誌の刊行に就ていろいろ相談しながら歩いて居た。話題はいつしか、入獄中の高岡を捨てゝ去つた或る女の事に移つた。

『君は、僕が知る前に、既にその事を聞き知つて居たかい。』

『うむ、ワイフが面會に來た時の話や、手紙なぞで、あら方は察して居た。君に別れたら、困る事が出來やしないかと思つて、實は多少心配して居たよ。……然し、君もあゝなつた方が、却つて幸福だつたかも知れないネ。』

『そりやそうだ。若しあゝならなかつたら、僕は今頃はまた屹と苦しんで居るだらう。殊にあゝいふ最後を遂げたので、僕のあの女に對する不愉快な感情も、今では殆んど無いしネ。』

『然し、僕も出て來た時は苦しんだよ。親父が死んだので、弟や妹を皆な引取らなけりやならなくなつたらう。是じや當分、到底運動なんか出來ないと思つたネ。マア、それぞれ片が付いたからいゝやうなものゝ、一時は何處かへ逃げて了はうかと思つた。そうすりやまた、引取つて世話する者はあるんだから。』

皆な苦しんで居る、皆な惱みがある。その苦しみや惱みを、そうやつて話しあつて居ると、高岡は弱い自分と、强い山田とが、一つに馳け合つて了ふやうに感じた。

大久保より

榮

■いよ〳〵廢刊號を出す事となつた。しかし僕等が此の雜誌をいやになつた理由に就いては、もう數號に亘つて書きならべてゐるので、今更大して云ひたい事もない。只だ此の廢刊に際して、其の其事情や後始末や又僕等の新しい雜誌の形式等に就いて、一言して置きたい。

■寒村と僕と二人は最初から廢刊を望んでゐた。しかし安成兄弟があとを引受けたいと云ふので、僕等二人は責任者の地位を退いて、雜誌は安成兄弟の手によつて引續いて發行される事に一とたびはきまつた。それで六月號の『大久保より』にも、さう發表して置いた。然るに其後安成兄弟は、勤先が馬鹿に忙しくてとても他の仕事をやれさうにもないので、遂に此の雜誌の繼續を斷念した。そこで話は又もとに戻つて、矢張りきれいに廢刊して了ふ事になつた。

■今廢刊に際して、一方には讀者諸君に、他方には寄書家諸君に、此の滿二ヶ年間の多大の御厚情を感謝すると共に、猶今後の僕等の事業に對しても、以前に增して御引立を蒙むらん事を切に御願ひする。

■僕等の新しい雜誌は『平民新聞』と名づける事にきめた。此の平民新聞と云ふ名には舊い歷史がある。幸德君と堺君とがやつた最初の週刊『平民新聞』は日露戰爭を動機として創刊された。其後に日刊『平民新聞』があつた。又半月刊『大阪平民新聞』があつた。尤も此の最後のは後改題して『日本平民新聞』と云つた。そして此の三つの間には著しい思想上及び態度上の進化があつた。僕等の『平民新聞』も、此の三時代を通過した後の新規まき直しの勞働運動の機關として、おのづから或る特色を帶びるに違ひない。

■『平民新聞』は、四六四倍即ち『へちまの花』と同じ型で、紙數は八頁。當分の間月一回の發行とする。隨分心細い小雜誌ではあるが、目下の僕等の力ではこれ以上の事は出來ない。猶其の內容や定價等に就いては、廣告面の御覽を願ひたい。

■『近代思想』の前金が殘つてゐる讀者諸君の中で、其の拂戾を求められる方は、至急其旨御通知を願ひたい。別に御通知のない方は、續いて『平民新聞』を購讀されるものと承知して置きます。猶『近代思想』の誌代滯りの諸君には、此際至急御拂込を願ひたい。六月號でも云つたやうに、此の滯りの分が全部集まれば、それだけでも新雜誌の創業費が出來る勘定になる。

■『平民新聞』の發行所はまだきまらないが保證金の都合上地方に置く事として、編輯販賣の事務は、當分の間一切近代思想社でやる。そして九月廿日頃に、近代思想社は平民社と改稱する。平民社の所在は、或は市內の何處かに變るかも知れんが、郵便物は當分今の所へ送つていたゞきたい。振替貯金の番號も今のまゝ。

■此の廢刊號は、寒村の創作と僕の評論との長篇を載せ、猶錦上花を添ふるに、從來の寄書家諸君の外に、諸先輩諸友人の寄稿を願つて ウンといゝ雜誌をつくるつもりでゐた。しかし思ふ事と遣る事とは中々一致しない。先づ錦の部では、僕のがとうとう織り上がらなかつた。花の方も、大ぶ咲かずに終つたのがあり、咲いても餘り見ばえのしないのが多かつた。

■僕は本月の始めから、ひまさへあれば其の腹案にかゝつてゐた。僕の思想の系統を明かにする爲めに、近代思想史と云ふやうなものを書く豫定だつたのだ。然るにいよ

〳〵本當の準備に入らうと云ふ矢先に、しばらく來なかつた下痢と風とに襲はれて了つた。そして十三日から十九日まで寢て了つた。廿日の朝は、起き上つて書き始めようと思つてゐたが、こんどは保子が風にかゝつて起き上がれない。僕は早速參考書を十册ばかりカバンにつめて葉山へ出掛けた。しかし葉山の三日間は、只だ大体の筋をつくつたのと、一枚書いては破り、二枚書いては破りして、二三十枚のむだ書をしたに過ぎなかつた。問題が少し大きすぎたのだ。準備が餘程足りなかつたのだ。そして一週間の發熱に頭が大ぶ亂されてゐたのだ。あせればあせる程益々頭が混亂して來る。

■仕方なしに、こんどは問題を少し縮めて『個人主義の種々相』と云ふ大体の筋だけをつくつて歸つて來た。そして今日まで四日間机に向つてもがいてゐる。しかし矢張り出來ない。暫く頭の中で考へて、筆を執り出さうとすると、原稿紙の舛の目を見たゞけで、目がくら〳〵して了ふ。とう〳〵斷念して了つた。

■しかし僕は、寒村の『夏』があるので、漸く安心して此の廢刊號を出す事になつた『夏』は寒村の最近に於ける最も印象の深い事件であつた。そして彼れは、此の事件及びそれに對する其の主觀を、有りのまゝにさらけ出した。僕は寒村の作物中、最もよく彼れの個性が現はれたものとして、此の『夏』と先きの『冬』とを尊重する。雜誌『新潮』の九月號に僕が書いたやうに、本當に彼れは、此等の作物に於て、文壇の唯一者である事を示してゐる。

■『近代思想』が其の存在の大部分を寒村に負ふ事は、此の廢刊號ばかりでない。『近代思想』を發起したのは僕だ。しかし其後の二ヶ年間は、誌面に現はれた部分でも、又現はれない部分でも、僕は殆んどなまけ勝で、寒村一人に全部を任して了つた月が多い。若し寒村がゐなかつたら、此の雜誌の存在も大して認められず、又其の存在すらも危ふかつたに違ひない。

■『夏』の中にもあるやうに、寒村は、福岡書店のエッセンス叢書の爲めに、ヘッケルの『科學者の信仰告白』を飜譯した。何れ近い中に出版される筈だ。

■僕の論文集『生の鬪爭』が、九月中旬に新潮社から出る。本號に載つた堺君の『大杉君と僕』及び相馬御風君の『人間主義』は、其の序文だ。猶馬場孤蝶生田長江兩君の序文も入る筈だ。例の關係から大ぶ難產ではあつたが、『本能と創造』、『道德の創造』及び『奴隸根性論』の三篇だけを拔いて、漸く產れ出る運びだけはついた。

■同じく九月中旬、新潮社の新潮叢書の一篇として、僕の飜譯ダアキンの『種の起原』が出る。それから、これも九月中旬頃、實業之世界社の新智識叢書の一篇として、僕の飜譯ギュスタヴ・ルボンの『物質非不滅論』が出る。

■本月十六日發行の『第三帝國』に、僕の『歐洲大亂と社會主義者の態度』が載つた。そして『第三帝國』は、僕のの外に二三の原因はあつたさうだが、發賣禁止になつた。僕は、實はあの文の爲めに、地方の一同志から、僕の態度の不鮮明をひどく叱られた程であつたのだ。それでもお上には氣に喰はなかつたものと見える。あんなホンの事實の記述だけでも書けない事となると、書ける間はそれだけでも多少の滿足を得られるが、こんどは直ちに其の事實を自分の事實にしなければ濟まなくなる。餘計なおセッカイはしない方がいゝよ。

—八月二十七日—

生活と藝術

九月號

街上不平（新詩二十篇）……土岐哀果

エルヴェいづこ（感想）……上司小劍

夏はふかかり（歌）……金子薫園

演劇上の象徴主義（評論）……伊庭孝

英國と露國（小品）……ウエルス 仲田勝之助

我が生家の追憶（小品）……クロポトキン 播磨楢吉

MEMO（感想）……土岐哀果

新しき詩歌……青年百餘家

定價金十八錢　郵税金一錢

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一一四）　東雲堂

青鞜

唯一の
純女流雑誌
九月號

三週年紀念號

九…

■エレン・ケイ女史の母權論

小説

□田村俊子
□野上彌生子
□伊藤野枝
□小林哥津

戯曲

紫玉（…
獵人（…
遺書の…
嫉妬の…

■個人主義と家族主義

■最近の感想

森田草平氏に　らいてう
安河内警保局長に　岩野清　らいてう
新しい女のために　上野葉
嘉悦孝子女史に　房枝
石橋臥波氏に　野枝

山と海（日記）　三…
微風（歌）　望月…
朝顔（詩）　岩淵百…
不平
新刊批評　同人

■女の好きな女

各方面に於ける婦人の各意見發表

發…

社…

生活と藝術

九月號

定價金十八錢
郵税金一錢

東京市日本橋區檜物町
（振替東京五六一四）
發行所　東雲堂

生活と藝術

九月號

定價金十八錢
郵稅金一錢

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四）　東雲堂

第二卷第八號

エゴ

九月號

九月一日發行

定價二十五錢

目次

挿畫

發行兼編輯所　東京市牛込區新小川町三ノ三一　エゴ社


天賞堂新製裝身具一斑
純金價二十圓
ダイヤモンド入
價千八百圓
廿二金價廿圓
十八金製價十八圓
二十金製價二十圓
眞珠入價十五圓
價十一圓・ルビー入
眞珠入價十八圓
ダイヤモンド入
價三百廿圓
ダイヤモンド入
價五十圓
ダイヤモンド入
價六十圓
十八金眞珠入タホ止價十一圓
ダイヤモンド入
價二十圓
十八金
價二圓半
十八金白金象嵌眞珠入價二十三圓
十八金價六圓
廿金價十七圓
ダイヤモンド入
價二十五圓
十八金價二十圓同上白金交り價十六圓
十八金眞珠入價二十三圓
大阪市心齋橋（電話南七三三）
横濱市常盤町（電話八七六）
天賞堂支店
東京市京橋區尾張町二丁目
電話新橋（特三三三 特三三四 特五七〇 三一五三）
天賞堂本店

近代思想
第二卷 第十一・十二號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正三年八月三十一日印刷納本（大正三年九月一日發行）
九月號
金貳拾錢

